
川 越 市

日枝神社遺跡

地方特定道路（改築）整備工事（県道川越越生線）事業関係

埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 7

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 住居跡床面から出土した遺物と火災の痕を示す炭化材



2 住居跡から出土した古墳時代前期の土器

日枝神社遺跡の紹介

本遺跡は、東武東上線霞ヶ関駅の北方約700mにあり、名前のおり日枝神社を中心とする遺跡です。また、約400m東の常楽寺周辺は、鎌倉時代にこの地を領していた河越氏の居館「河越館跡」として国の史跡に指定されています。

今回は、県道川越越生線の拡幅工事に伴う調査で、上戸交差点の南東角地を発掘したところ、僅か116㎡と狭い範囲ながら多くの土器が残されていた古墳時代（約1,700年前）の住居跡や鎌倉時代の大型の溝跡など貴重な成果が得られました。特に、日枝神社が河越氏と関係が深く居館も近いことから、発見された溝跡の性格が注目されます。

序

埼玉県では、「人と自然にやさしい道づくり」を基本理念とし、「時間が読める道づくり」と「安心と活力の道づくり」を目標に道路整備を進めてまいりました。また、その具体的整備方針の一つである「安心・安全な道路空間の形成」のためには、誰もが安心して通行できる道路の整備とともに、日常生活における利便性の向上も大切な課題であります。

県道川越越生線は、通学路、生活道路として川越市北西部地域の市民生活を支えている重要な道路であり、特に安心・安全を念頭においた整備を進めております。今回、整備の一環として拡幅工事が実施されることとなり、その事業地内に所在する日枝神社遺跡の取り扱いについて、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受けて当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡のほか、鎌倉時代の溝跡や土壇などの遺構が発見され、狭い範囲ながら大きな成果を上げることができました。また、遺跡名の日枝神社は、鎌倉時代にこの地を領していた河越氏と関係の深い神社と言われており、今回発見された遺構も、この地の歴史を裏付ける貴重な資料と言えます。

本書は、これら発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として広くご活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、川越県土整備事務所、川越市教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成19年 6月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

例言

1. 本書は、川越市に所在する日枝神社遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

日枝神社遺跡第2次（HEJNJ）
埼玉県川越市上戸315-2番地他
平成18年12月7日付け 教生文第2-70号
3. 発掘調査は、地方特定道路（改築）整備工事（県道川越越生線）事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査・整理報告書作成事業は、I-3の組織により実施した。調査は、平成18年12月1日から12月31日まで、田中広明が担当して実施した。

整理報告書作成事業は、平成19年2月23日から4月23日まで、宮井英一が担当して実施し、平成19年6月30日に事業団報告書第344集として印刷・刊行した。
5. 発掘調査における基準点測量は株式会社未央測地設計に委託した。

また、出土品の樹種同定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は田中が行い、出土遺物の写真撮影は赤熊浩一が行った。
7. 出土品の整理・図版作成は宮井が行い、福田聖と山北美穂の協力を得た。
8. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、II・IIIを鈴木、IVを富田和夫・赤熊・福田、Vを野村敏江、VIを福田が行い、他は宮井が行った。
9. 本書の編集は、宮井が行った。
10. 本書に掲載した資料は、平成19年7月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。
11. 発掘調査、本書の作成にあたり、下記の機関・方々からご教示を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。

川越市教育委員会 田中 信 岡田賢治
平野寛之

凡例

1. 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系による国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36°00'00"、東経139°50'00")に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を示す。

B-2グリッド北西杭の座標は、X=-7450.00m、Y=-35180.00m、北緯35°55'55"9844、東経139°26'36"4178である。
2. 調査でを使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲を基本(1グリッド)としている。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット(A・B・C…)、西から東方向に数字(1・2・3…)を付し、両者を組み合わせて(例えばB-2グリッド等)呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は、以下のとおりである。
5. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もある。

全測図 1/80
遺構図 1/60
土師器・須恵器など 1/4
6. 遺物実測図の表記方法は、以下のとおりである。

断面を黒塗りしたものは須恵器。また、赤彩された土器については、その範囲に網を掛けて示した。
7. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示す。
8. 本書に使用した地図は、国土地理院発行1/25,000及び川越市都市計画図1/2,500である。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	1. 住居跡	11
1. 発掘調査に至る経過	1	2. 溝跡	22
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	3. 土壌	23
3. 発掘調査・報告書作成の組織	2	4. ピット	24
II 遺跡の立地と環境	3	5. グリッド出土遺物	24
1. 地理的環境	3	V 炭化材の樹種同定	25
2. 歴史的環境	5	VI 調査のまとめ	27
III 遺跡の概要	7		
IV 遺構と遺物	11	写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	3	第11図 第1号住居跡出土遺物(1)	16
第2図 周辺の遺跡	4	第12図 第1号住居跡出土遺物(2)	18
第3図 遺跡調査範囲	8	第13図 第1号溝跡	21
第4図 基本層序	8	第14図 第1号溝跡出土遺物	23
第5図 日枝神社遺跡と河越館跡	9	第15図 第1号土壌	23
第6図 調査区全体図	10	第16図 ピット	24
第7図 第1号住居跡炭化材出土状況	12	第17図 グリッド出土遺物	24
第8図 第1号住居跡遺物出土状況	13	第18図 古墳時代出土土器関連資料(1)	28
第9図 第1号住居跡	14	第19図 古墳時代出土土器関連資料(2)	29
第10図 第1号住居跡掘り方	15		

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表 ……………	5	第3表 出土炭化材の樹種同定結果 ……………	26
第2表 ピット一覧表 ……………	24		

写 真 図 版 目 次

巻頭図版1	1	住居跡床面から出土した遺物と火災の痕を示す炭化材	
	2	住居跡から出土した古墳時代前期の土器	
図版1	1	調査区全景	2 第1号住居跡出土遺物(第11図6)
	2	第1号住居跡・第1号溝跡	3 第1号住居跡出土遺物(第11図7)
図版2	1	第1号住居跡遺物出土状況	4 第1号住居跡出土遺物(第12図8)
	2	第1号溝跡(北側部分)	図版6 1 第1号住居跡(第12図19~25)
図版3	1	第1号溝跡(南側部分)	2 第1号住居跡(第12図26~30)
	2	調査区南壁断面	図版7 1 第1号住居跡出土遺物(第12図15)
図版4	1	第1号住居跡掘り方	2 第1号住居跡出土遺物(第12図16)
	2	第1号住居跡遺物出土状況	3 第1号住居跡出土遺物(第12図18)
	3	第1号住居跡壁溝検出状況	4 第1号住居跡出土遺物(第11図1)
	4	第1号住居跡炭化材出土状況(1)	5 第1号溝跡出土遺物(第14図1)
	5	第1号住居跡貯蔵穴	6 第1号溝跡出土遺物(第14図3)
	6	第1号住居跡遺物出土状況	図版8 1 第1号溝跡出土遺物(第14図2)
	7	第1号住居跡炭化材出土状況(2)	2 グリッド出土遺物(第17図)
	8	第1号住居跡炭化材出土状況(3)	3 出土木製品材組織の光学顕微鏡写真
図版5	1	第1号住居跡出土遺物(第11図1)	

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、新たな5か年計画『ゆとりとチャンスの埼玉プラン』においても「渋滞のない円滑な自動車道の実現」という基本目標を掲げて、県内道路交通網の整備を推進している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、これら県が実施する公共開発事業にかかる埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

道路事業（県道川越越生線）に係る埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについては、平成18年7月14日付け道街第180号で道路街路課長から、生涯学習文化財課長あて照会があった。

これを受けて生涯学習文化財課では、試掘による確認調査を実施し、日枝神社遺跡（No.19-44）の所在が確認された。平成18年9月19日付け教文第1379号で道路街路課長あて、埋蔵文化財の所在及び法手続きに関することとともに、その取り扱いについて、「工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を

実施」することを回答した。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、川越県土整備事務所、生涯学習文化財課の三者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。

その結果、発掘調査は、平成18年12月1日～平成18年12月31日の期間で実施された。

なお、文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が川越県土整備事務所長から平成18年11月22日付け川整発第1326号で出された。このことに対する保護法上必要な勧告は、平成18年12月7日付け教生文第3-996号で行った。

文化財保護法第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、このことに対する指示通知を、平成18年12月7日付け教生文第2-70号で行った。

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

日枝神社遺跡の発掘調査は、平成18年12月1日から平成18年12月31日まで実施した。調査対象地は、「川越西文化会館」南側に位置する上戸交差点南東の角地で、面積は116㎡である。

12月1日に、囲柵・事務所の設置等の準備を行い、4日には重機による表土除去作業を行った。

表土除去終了後、人力による遺構確認作業を行ったところ、調査区の中央付近に竪穴住居跡・溝跡・土壇等の遺構が検出されたため、直ちに遺構の精査を開始し、順次土層断面図・平面図等の作成及び写真撮影を行った。

なお、検出された古墳時代前期の住居跡には、火災による炭化材が良好な状態で遺存していたため、住居の構築方法や構造を知るため自然化学分析を行うこととし、26日に取り上げ作業を行った。また、調査区の立地から、遺跡の垂直記録写真には高所作業車を利用した。

遺構の調査終了後、事務所の撤去及び事務手続きを行いすべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

日枝神社遺跡の整理作業は、平成19年2月23日から平成19年4月30日まで実施した。

2月下旬から、出土品の水洗・注記を行い、続いて接合・復元作業に移った。

遺構図に関しては、各種図面の整合性をとった上で作成した第二原図をデジタル化し、コンピュータ上でトレース作業を行った。

土器・石器等の遺物に関しては、接合・復元作業の後、拓本・実測作業を行い、続いて写真撮影を行った。

4月上旬から図面・写真・本文の割付作業と原稿執筆を進め、下旬には印刷業者を選定して入稿した。校正は3回を行い、平成19年6月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成18年度（発掘調査）

理事長	福田陽充	調査部長	今泉泰之
常務理事兼総務部長 総務部	岸本洋一	調査部副部長兼 資料活用部副部長	小野美代子
総務部副部長	昼間孝志	調査第二課長	細田勝
総務課長 調査部	高橋義和	主査	田中広明

平成19年度（報告書作成）

理事長	刈部博	調査部	
常務理事兼総務部長 総務部	岸本洋一	調査部長	村田健二
総務部副部長	昼間孝志	調査部副部長兼 資料活用部副部長	磯崎一
総務課長	松盛孝	調査第二課長	宮井英一

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

日枝神社遺跡は、川越市上戸315-2番地に所在し、東武東上線霞ヶ関駅の北約700mにあたる。

川越市は、埼玉県内において県中央のやや南寄りに位置している。地理的には武蔵野台地北辺にあたる川越台地と、秩父山地から連なる入間台地にまたがっており、東に荒川を臨む。市内の西部から北部にかけては入間川が流下している。入間川は北の坂戸市、川島町との境で越辺川、小畔川と合流する。

多摩川から荒川の間広がる地形は、いずれも関東山地から発する河川によって形成されている。現在みられる地形は、最終氷期以降に、それまでの海域が陸域に変化することで発達してきた。川越市の南部・北東部がのる武蔵野台地は、多摩川による扇状地性の台地として知られている。

武蔵野台地のうち、埼玉県南部に広がる綾瀬川以北の部分を川越台地と呼び、さらに狭山市尾花

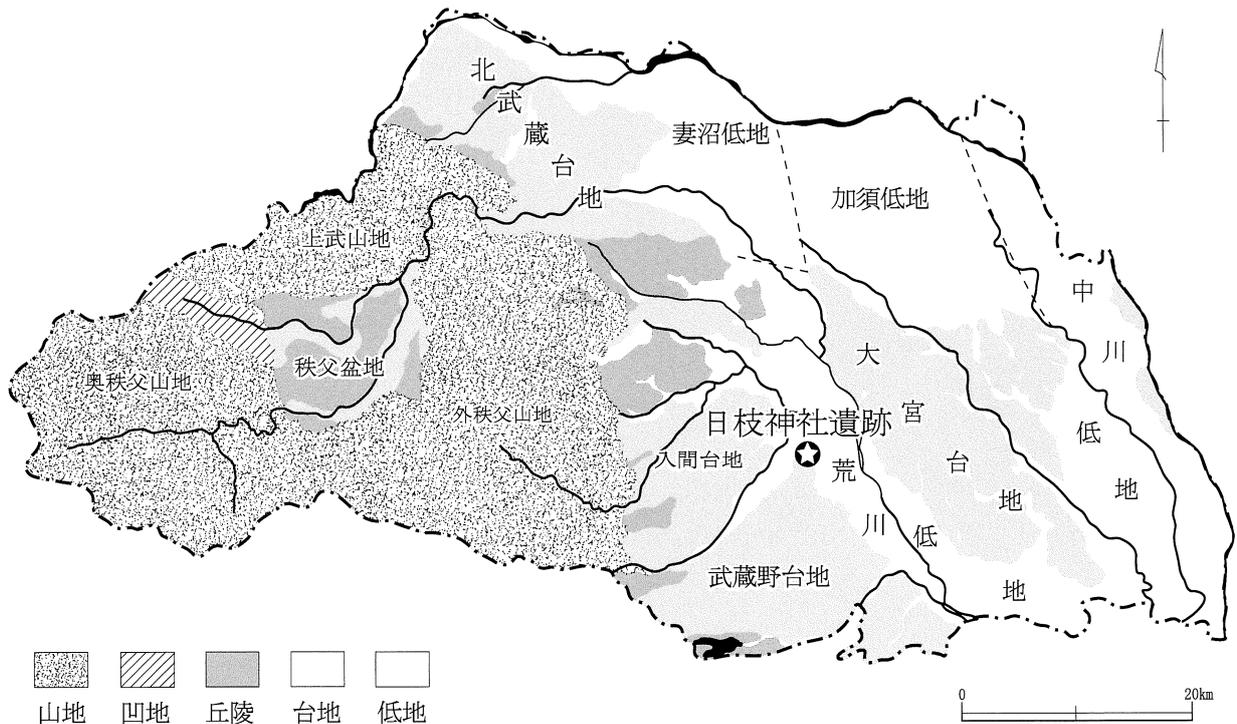
台から川越市宮下町までの台地北西端の一面を川越台と呼ぶ。

入間台地は、入間川・越辺川・高麗川によって形成された扇状地性の台地を指す。川越市域はこのうち川越台と、入間台地の一部を占めている。

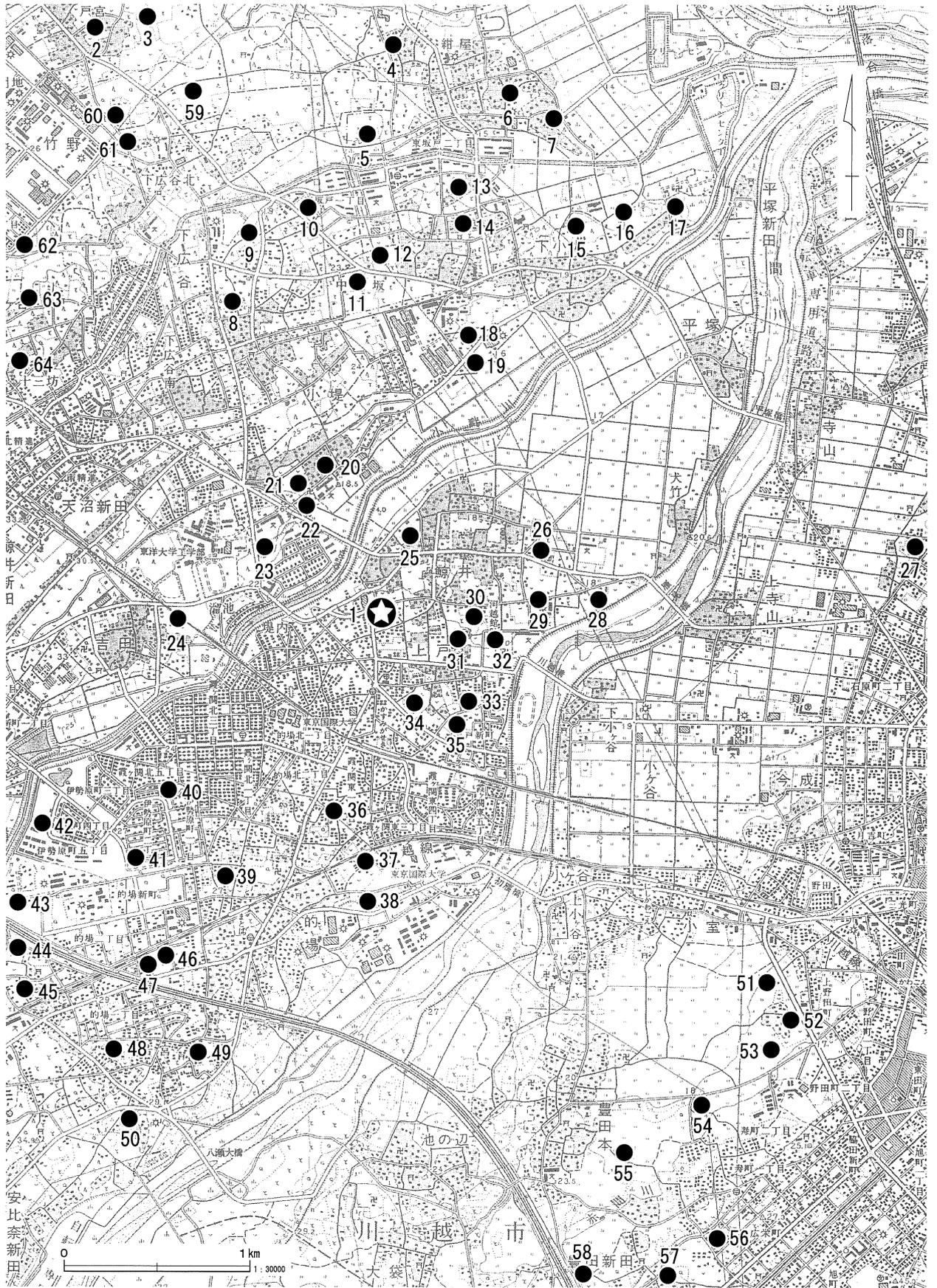
現在の市街地は川越台の北端部に広がり、川越台は武蔵野台地という扇状地の扇の北端に相当する。標高は、狭山市側で約60m、北東端の市街地で約20mを測る。地形は、南西方向から北東方向へと降下し、荒川に面した低地に接する。

J R川越線川越駅北東の市街地では、標高は20m前後であり、地形は比較的平坦である(第2図)。

川越台と低地との境は、標高20mの等高線付近を走っている。この等高線は、砂久保から北上して久保川をまたぎ、大仙波で新河岸川とぶつかる。これが地形変換線であり、東側に急傾斜で降下し、低地へと至る。低地での標高は12m前後である。



第1図 埼玉県の地形



第2図 周辺の遺跡

台地と低地の境はここから段丘崖をなし、新河岸川沿いに宮元町まで北上し、南西に下って三光町まで明瞭な崖線を形成する。

台地は低地に向かって北に張り出す形となり、低地との比高差は3～7mである。等高線はそのまま地形変換線として、豊田新田を通して北東—南西方向へと直線的に続く。

この地形変換線と平行して、赤間川が流れている。台地と赤間川の間部は、低地との比高差が2～3mのごく緩やかな傾斜面となっている。赤間川左岸には複数の遺跡が点在し、右岸あたりが台地と低地との境となる。台地から低地に至る間のごく緩やかな傾斜面は、同じ武蔵野台地では、東京の谷田川の谷沿いにおいても確認されており、台地の間を流れる中小河川でしばしば形成される微地形であると推定される。

入間川は、川越台と入間台地の間に幅広い谷を

形成し、谷底には扇状地性の低地が発達する。

入間川右岸の台地沿いに広がるごく緩やかな傾斜地形も、最終氷期以降の入間川の河成作用によって形成されたものと考えられる。

2. 歴史的環境

入間川を挟んで展開する川越の地では、浅間神社南遺跡において旧石器時代の礫群が検出されている。

ついで縄文時代では、花見堂遺跡(29)、小仙波貝塚、弁天南遺跡、寺尾貝塚など、早期や前期の遺跡が確認されている。小仙波貝塚は、縄文海進時に古東京湾最深部に形成された前期の貝塚である。この他にも、近隣には富士見野市上福岡貝塚、富士見市打越貝塚、水子貝塚など、この時期の貝塚が数多く知られている。後期では、熊野神社西遺跡、登戸遺跡(19)などがある。川越台にのる川

第1表 周辺の遺跡一覧表

市町名	No.	遺跡名	時代
川越市	1	日枝神社遺跡	古墳・平安
坂戸市	2	町東遺跡	古代
坂戸市	3	精進場遺跡	古代
坂戸市	4	丸山遺跡	縄文・古墳・古代
坂戸市	5	景台遺跡	縄文・弥生・古墳・中世・近世
坂戸市	6	宮東遺跡	古墳・古代
坂戸市	7	高窪遺跡	縄文・弥生・古墳
坂戸市	8	原遺跡	中世
坂戸市	9	西窪遺跡	縄文
坂戸市	10	大穴遺跡	縄文
坂戸市	11	金山遺跡	弥生・古墳
坂戸市	12	上谷遺跡	古墳・古代
坂戸市	13	天王山古墳群	古墳
坂戸市	14	前林遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
川越市	15	大道端遺跡	平安
川越市	16	前谷遺跡	古墳・平安
川越市	17	西尻遺跡	古墳
川越市	18	下小坂古墳群	古墳
川越市	19	登戸遺跡	縄文・弥生・古墳
川越市	20	夜幣賀伎東遺跡	古墳
川越市	21	夜幣賀伎西遺跡	古墳
川越市	22	八幡遺跡	古墳
川越市	23	春日山辺遺跡	縄文
川越市	24	堂山遺跡	縄文
川越市	25	有泉遺跡	古墳・平安
川越市	26	会下遺跡	古墳・中世
川越市	27	南山田遺跡	弥生・古墳・古代
川越市	28	浅間下遺跡	弥生・古墳・古代
川越市	29	花見堂遺跡	縄文・古墳・平安・中世・近世
川越市	30	龍光遺跡	古墳・奈良・鎌倉
川越市	31	新田屋敷遺跡	古墳・奈良・平安・中世
川越市	32	河越館跡	古代

市町名	No.	遺跡名	時代
川越市	33	天王遺跡	古墳・平安・戦国
川越市	34	山王久保遺跡	古墳・奈良・平安
川越市	35	霞ヶ関遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世
川越市	36	南紫野遺跡	奈良・平安
川越市	37	牛塚古墳	古墳
川越市	38	東下川原遺跡	古墳
川越市	39	南女堀遺跡	古墳
川越市	40	女堀II遺跡	古墳
川越市	41	東女堀原遺跡	縄文・古墳・中世
川越市	42	御伊勢原遺跡	縄文・古墳・近世
川越市	43	上組II遺跡	縄文・弥生・古墳・中世
川越市	44	上組遺跡	縄文・古墳・古代・中世
川越市	45	前大町遺跡	縄文・弥生・古墳
川越市	46	五畑東遺跡	奈良・平安
川越市	47	五畑西遺跡	奈良・平安
川越市	48	西若宮遺跡	古墳
川越市	49	八幡前・若宮遺跡	奈良・平安・中世・近代
川越市	50	東下沢遺跡	縄文・古墳・古代
川越市	51	上野田A遺跡	奈良・平安
川越市	52	上野田B遺跡	奈良・平安
川越市	53	大下遺跡	奈良・平安
川越市	54	会の田遺跡	奈良・平安
川越市	55	第六天遺跡	平安
川越市	56	天屋坂遺跡	古墳
川越市	57	山王脇遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
川越市	58	南大塚古墳群	古墳
川越市	59	大堀山館跡	南北朝・室町・戦国
川越市	60	戸宮前遺跡	中世
川越市	61	在家遺跡	旧石器・縄文・中世
川越市	62	宮廻遺跡	旧石器・縄文・中世
鶴ヶ島市	63	鶴巻遺跡	縄文・古代
鶴ヶ島市	64	松原前遺跡	古墳

越城跡では、弥生時代中期の竪穴状遺構と土坑が確認されている(天ヶ嶋2003)。近隣では南東の白子川から綾瀬川流域にかけて10遺跡が分布するほか、北西の入間台地で市内の登戸遺跡(19)、霞ヶ関遺跡(35)において住居跡数軒が検出されている。後期は川越台ではやや不明確であるが、浅間下遺跡(28)や霞ヶ関遺跡(35)に集落が残されている。

古墳時代に入ると、遺跡は徐々に数を増していく。元町2丁目遺跡、小仙波4丁目遺跡、弁天西遺跡は古墳時代前期ないし中期の遺跡として知られている。弁天南遺跡では前期の方形周溝墓が確認されており、小仙波一帯に古墳時代前期の集落が存在していた可能性が考えられる。後期の集落では浅間神社南遺跡があり、久保川の流域にまで広がっている。さらに熊野神社西遺跡では、古墳時代末から奈良時代にかけての集落が検出されている。仙波古墳群は川越台の東縁に広がる古墳群で、北は多宝塔古墳から南は浅間神社古墳までを含む。これらは、いずれも古墳時代後期と考えられる。これらの他に、久保川流域には中台山古墳など3基があり、山王脇遺跡(57)でも周溝が検出されている。

奈良時代・平安時代では、東山道が川越市内を通過し、古海道東遺跡で東山道武蔵路と中世の鎌倉街道が重複するのが確認されている(2006年9月8日付け新聞各紙)。東山道の東約1kmに位置する霞ヶ関遺跡(35)は、奈良時代からの遺跡で、平安時代には周辺の天王遺跡(33)などへと展開していく。9世紀前葉には、溝と柵、あるいは塀で区画した中に、掘立柱建物跡群が建てられていた。霞ヶ関遺跡関係では、「入厨」と墨書された須恵器の坏と椀が検出されている。この事実が、直接郡衙を実証する遺物とまでは言えないものの、入間郡衙を検討するに当たって見逃せない資料の一つである。川越台に広がる遺跡は、弁天西遺跡をはじめとする集落が広がるが、仲町遺跡では大型住

居跡や方形井戸などが確認され、緑釉陶器稜碗なども出土している。

古代末から中世にかけて、現在の埼玉県域に相当する地域で「武蔵七党」等の武士団が、新興勢力として活躍するようになる。律令制による中央集権体制が崩壊していく中、各地で騒乱が相次ぐようになる。騒乱の討伐や源平合戦など、数々の歴史的動乱を経ながら、関東における武士は、着実に歴史の表舞台に立つようになっていった。

川越に最も縁のある一族のひとつに河越氏が挙げられる。平安末期に源頼朝が挙兵、平氏政権を打倒し関東に武家政権を樹立した当初から、河越氏は源氏に従って活躍した。河越氏に関わる遺跡としては、河越館(32)がある。河越館は、入間川を挟んで川越城とは対岸の上戸地区にあったと推定されており、国指定史跡となっている。周辺には中世の居館跡が多く、中世前半当時の繁栄振りが想起される。

中世も室町時代中期に至ると、騒乱の様相が色濃くなり始める。川越は、山内上杉氏と扇谷上杉氏の争いの場となった。扇谷家は宝徳元(1449)年頃から川越地方に支配を延ばしたとみられ、長禄元(1457)年に太田道真・道灌に岩付城、江戸城と共に川越城の築城を命じている。この頃山内家は河越館を拠点としており、入間川を挟んで対峙した。その後、川越城は天文6(1537)年に北条氏綱の手に渡り、後北条氏の関東における一拠点となった。川越城は、天正18(1590)年の北条攻めに際して落城し、酒井重忠が一万石で川越藩主となり、近世の川越が始まった。以後、酒井家の他に堀田氏、松平氏、柳沢氏、秋元氏といった徳川家の重臣たちが、川越を治めることになる。川越は交通の要衝でもあり、川越藩は徳川幕府においても重要な位置付けがなされていたと考えられる。

参考文献 天ヶ嶋2003 落合2001
金子2001 菊地2007 栗岡・安生2005

III 遺跡の概要

日枝神社遺跡は、川越市上戸315-2番地に所在する。本遺跡は、入間川と小畔川に挟まれた川越台地の北部に位置し、標高は20mである。位置的には、小畔川から距離0.3kmの右岸、入間川からは距離7kmの左岸にあたる。遺跡周辺は現在、市街地となっている。

遺跡名の由来となっている上戸日枝神社は、往時新日吉山王権現いまひえと称しており、坂東八平氏のひとつで秩父氏の流れを汲む河越氏による荘園経営と密接な結びつきをもった神社である。河越荘は、平安末期からこの地方を支配していた河越氏が、所領を京都の新日吉社に寄進し、預所となったことに始まる。この新日吉社は、後白河法皇が永暦元(1160)年、近江にあった日吉社を、自らの住む法住寺御所に勧請したことにはじまる神社である。その関係で、当地に新日吉山王権現を勧請したとされている。

現在、上戸日枝神社の社域は東西180m、南北300m程の、南北方向に長い長方形を呈する。『新編武蔵風土記稿』の挿絵には、神社の社域に土塁が巡らされているが、現在も一部に痕跡が認められる。

河越氏が12世紀末に居を構えた地は、現在の川越市上戸常楽寺周辺と考えられており、昭和59年、この一帯は国指定史跡「河越館跡」となっている。この地域は、西側には東山道武蔵路が通っており、これを南下すれば武蔵国府に通じる。そして、東には入間川が流れていることなどをみても、かつては交通の要衝であったと推測される。

河越氏が勧請した新日吉山王権現は、河越館跡の西約0.4kmというきわめて接近した位置にあり、両者は対を成すとも考えられよう。

今回の発掘調査地点は、上戸日枝神社の境内に位置することから、日枝神社遺跡と命名された地域内に該当する。日枝神社遺跡に設定された位置

と範囲は、現在の日枝神社の社域に一致するものである。日枝神社遺跡は、平成8年度に川越市教育委員会によって調査が実施され、中世の道と推定される硬化面と、堀の一部が検出されている。

今回の調査はそれに続くもので、第2次調査となる。第2次調査の調査地点は、南北10m、東西9mの五角形に近く、調査面積は116m²である。検出された遺構は、以下のとおりである。

古墳時代前期	竪穴住居跡	1軒
中世	溝跡	1条
不明	土壇	1基
	ピット	12基

竪穴住居跡は、長軸7m×短軸6mの大型で、平面形は隅丸方形を呈するものである。屋内には、数多くの炭化材が残されていたことから、焼失住居であることが判明した。これらの炭化材は、この竪穴住居の柱・屋根・壁などの部材である可能性が高い。さらに炭化材の下からは、台付甕や器台などが出土した。

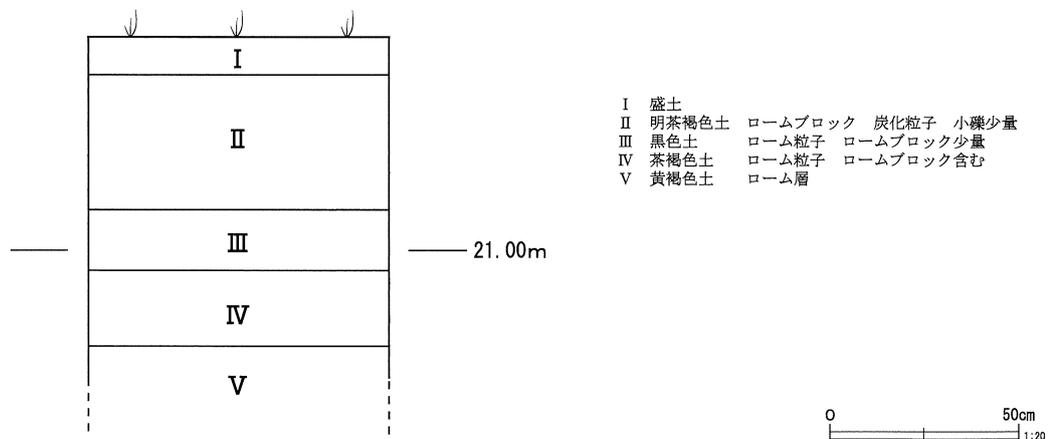
以上の点から、これらの土器はこの竪穴住居が焼失する以前に屋内に存在していたものであると表現できる。

溝跡は、幅2.5m、深さ0.7mの規模をもつ大型の溝である。この溝の下層より出土した遺物から、鎌倉時代の溝の可能性が高いと考えられる。

既述のように日枝神社は、12世紀後半に河越氏がこの地に勧請した神社である。今回、鎌倉時代にまで遡る溝跡が検出されたということは、文献史料とも符合しており新日吉山王権現や、延いてはこの地域の歴史を考える上で、貴重な成果であったといえる。



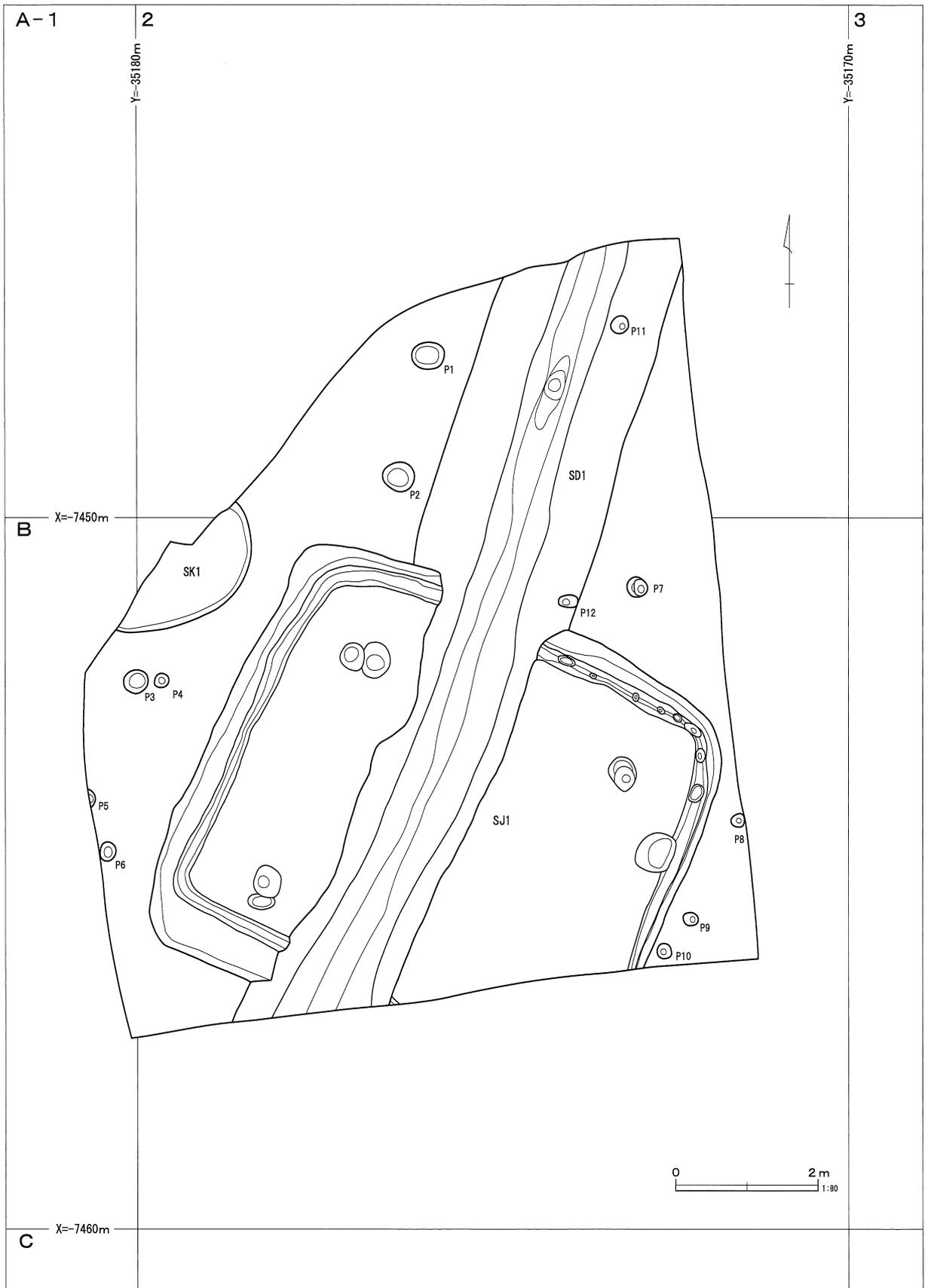
第3図 遺跡調査範囲



第4図 基本層序



第5図 日枝神社遺跡と河越館跡



第 6 図 調査区全体図

IV 遺構と遺物

1. 住居跡

第1号住居跡（第7～10図）

第1号住居跡はB-2グリッドに位置する。南東隅部が調査区外に位置するが、遺構の大半は調査できた。但し、住居跡の中央部を中世の堀跡（第1号溝跡）によって削平されていた。

調査の結果、南壁及び西壁では壁から離れた位置に壁溝が巡ることから、住居跡は一度建て替えられたことが判明した。壁溝の状態から拡張されたと考えられる。拡張前の住居跡を第1b号住居跡、拡張後のそれを第1a号住居跡と呼称する。

第1a号住居跡は平面形態略方形で、規模は長軸長6.90m、短軸長6.35m、深さ約0.40mである。主軸方位はN-24°-Eを指す。

第1b号住居跡の平面形は方形で、規模は長軸長6.40m、短軸長5.65mである。主軸方位は第1a号住居跡と同一である。

床面は第1a号住居跡に帰属するが、第1b号住居跡のそれもほぼ同一であった可能性が高い。床面は平坦で、全体的に硬く踏み固められていた。

覆土は全体的にロームブロックの混入量が多く、第5層以下には焼土と炭化物が多量に含まれていた。特に第12層は焼土ブロックが主体的で、第13層には炭化物の混入が目立った。また、東半部の床面に被熱部分が大きく広がっており、炭化材が壁際を中心に多量に検出されたことなどから、火災によって焼失した住居跡と考えられる。また、A-A断面には土壌状の掘込みが認められた（第1・2・3層）。第1号溝跡に由来するものかもしれない。

炉跡は検出されなかった。第1号溝跡によって削平されたと推定される。

ピットは13基検出された。P2～P5は支柱穴と考えられる。P3とP4は隣接することから、P4からP3へ、建て替えに伴って柱穴を掘り直

した可能性が高い。

貯蔵穴は東壁際に位置する。形態は楕円形で、規模は径50～55cm、深さ65cm。内部から土師器台付甕が潰れた状態で2個体出土した（第11図7、第12図8）。

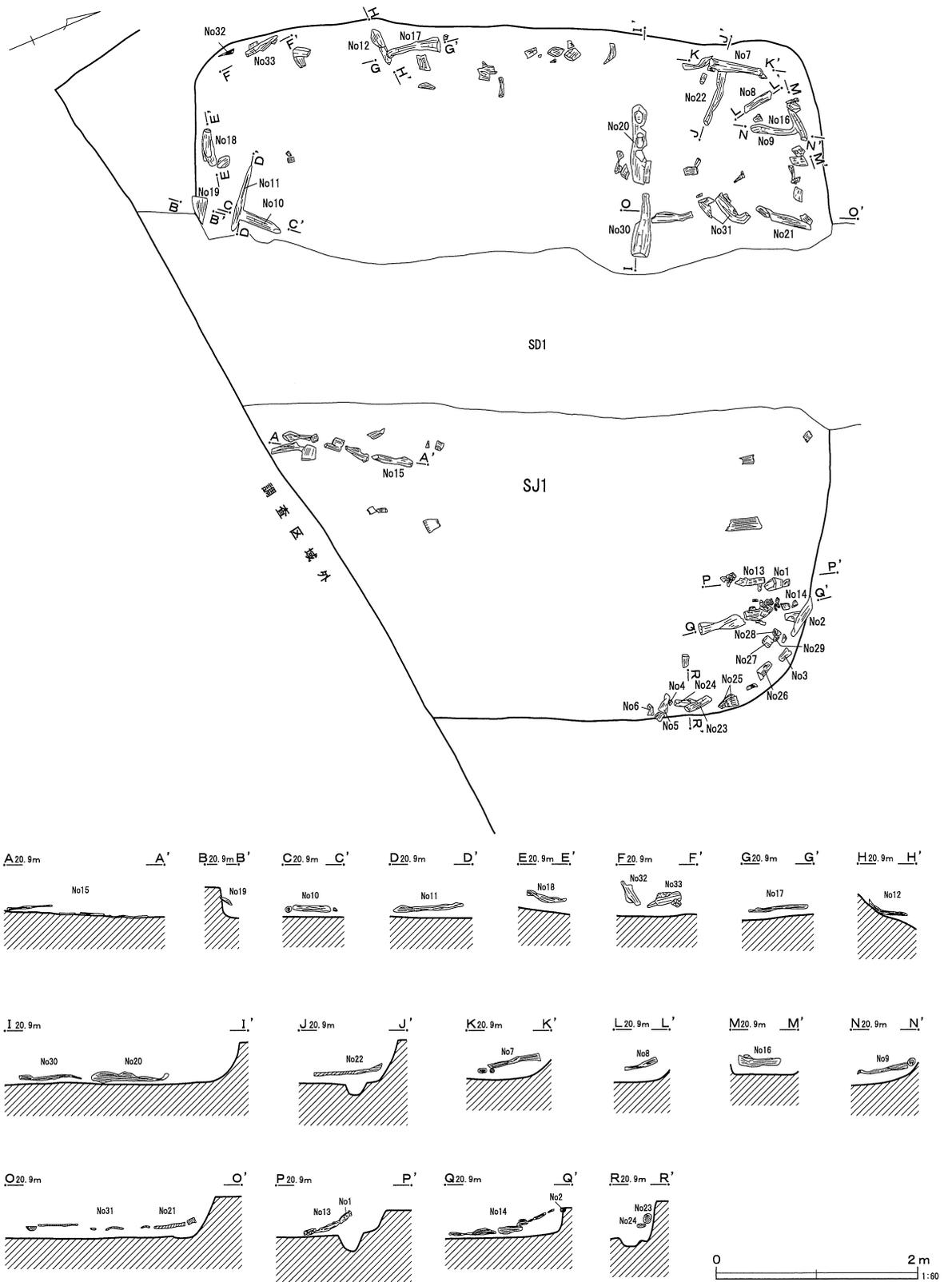
その他、第1b号住居跡壁溝内から小ピットが8基検出された（P6～P13）。性格は不明確であるが、壁板を押さえた杭の痕跡であろうか。

調査終了後、床面を除去したところ、住居中央部を掘り残し壁際を一段深く掘った、方形周溝墓状の掘り方が検出された（第10図）。

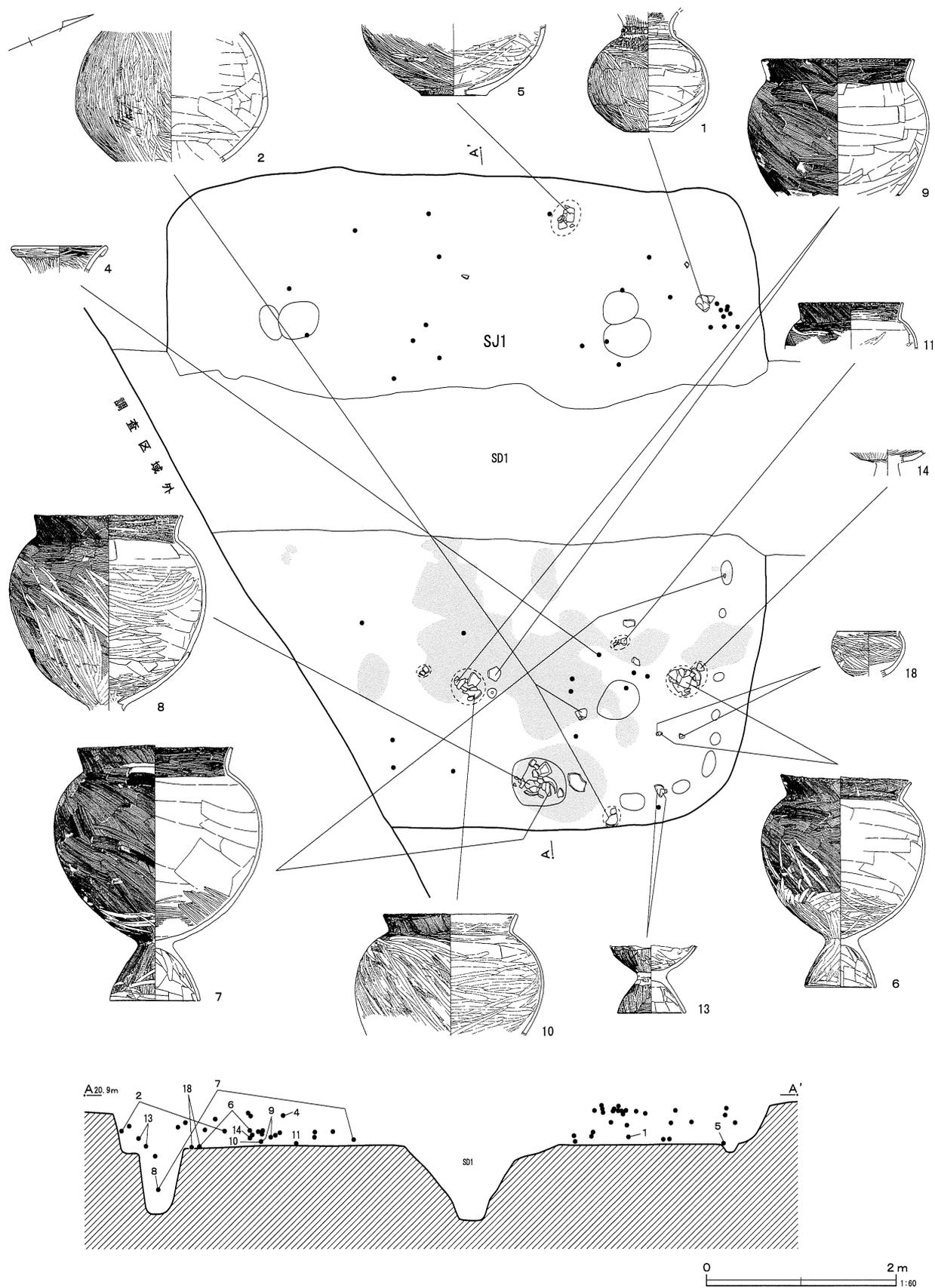
出土遺物は比較的多く、覆土上層から床面まで出土しているが、器形の復元できる遺物は覆土下層から床面にかけて主に出土した。器種としては土師器壺・台付甕・高坏・器台がある（第11・12図）。1の壺は口縁部を欠くが、頸部に円形浮文、肩部に網目状撚糸文風の縄文を縦・横と方向を変えて施文している。非常に特異な土器である。北壁近くの覆土下層（床面上約7cm）から出土した。7・8の台付甕は貯蔵穴内に落込んだ状態で、6の台付甕は北壁際の床面から覆土下層（床面上4cm）にかけて出土した。9は床面上4～9cm、10は床面上4cmから出土した。15の高坏はほぼ床面、16の小型器台もほぼ床面から出土した。火災の影響を受け、二次被熱が著しい。

炭化材は壁際を中心に多量に出土した。壁に平行するものと直行するものが多い傾向は指摘できる。明確な支柱は摘出できない。炭化材No.20・30、15は梁または桁材であろうか。その他は垂木材の一部と考えるのが妥当であろうか。

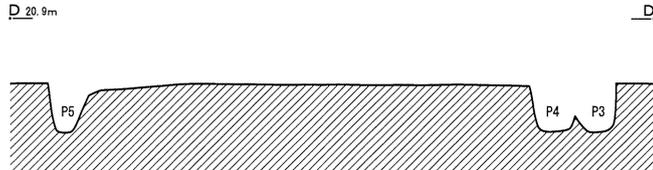
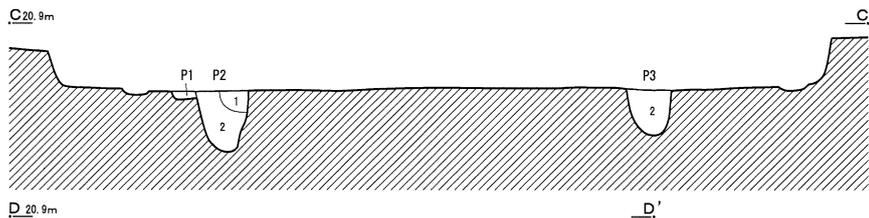
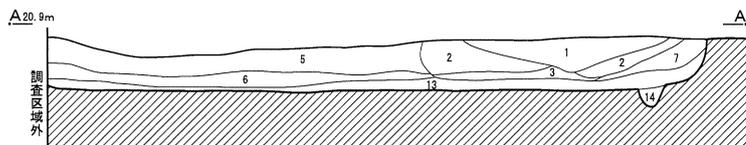
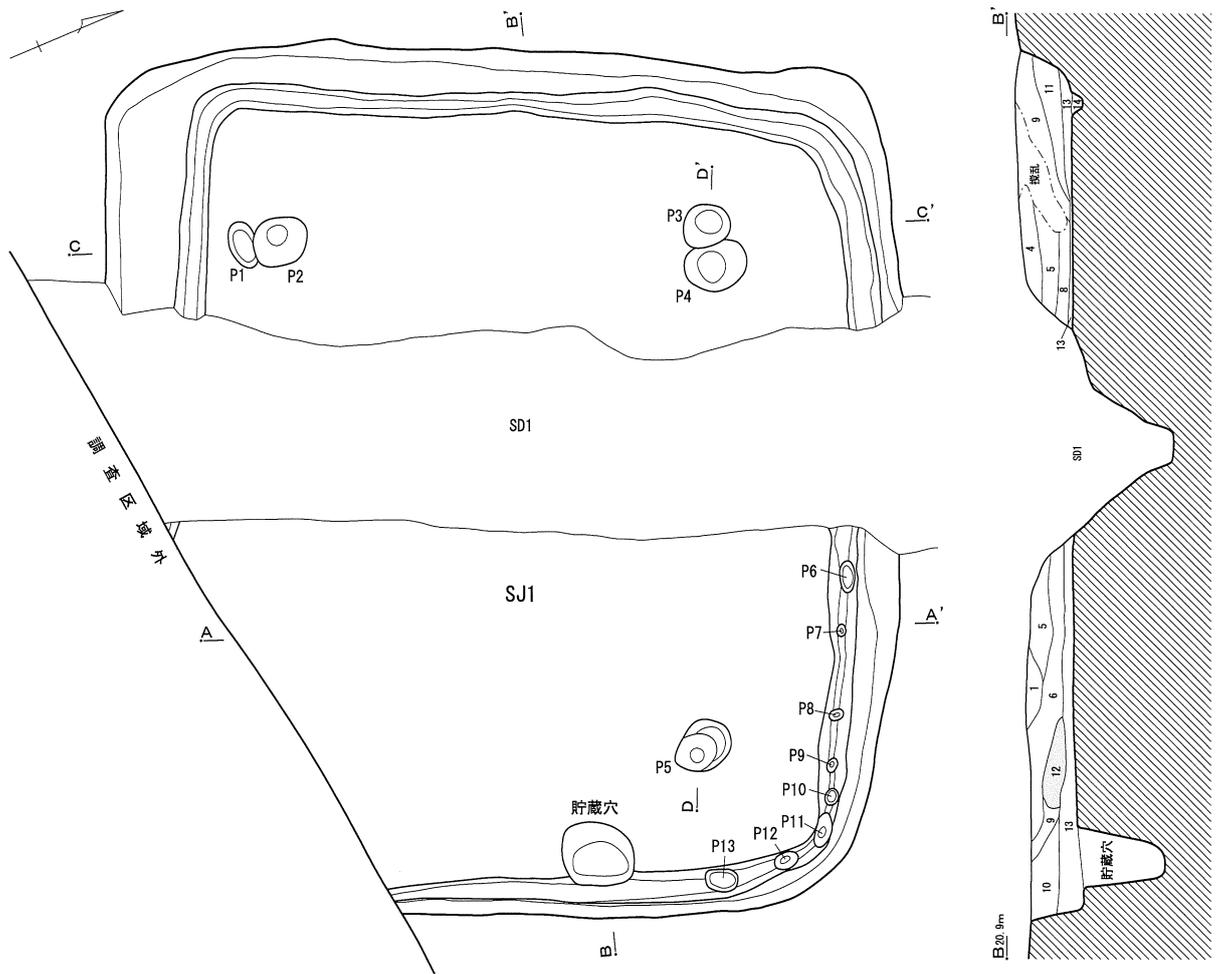
炭化材は33点をサンプリングした。その内、北東隅部付近から出土したNo.1・2・4・23・25・26・27と北壁付近のNo.21・31を選択し、樹種同定したところ（第V章参照）、全ての資料がクヌギ節



第7图 第1号住居跡炭化材出土状况



第8图 第1号住居跡遺物出土状況



ピット
 1 暗褐色土 ロームブロック・炭化物
 含む しまりなし
 2 褐色土 ロームブロック多量
 しまりあり
 ※ピット2・3・5に共通し、柱を抜き取
 った後に埋め戻されたと考えられる

- SJ1
- 1 暗褐色土 ロームブロック含む ローム粒子多量 しまりなし
 - 2 暗茶褐色土 ロームブロック多量 ローム粒子含む しまりなし
 - 3 暗茶褐色土 ローム粒子含む
 - 4 黒褐色土 ロームブロック・焼土ブロック含む しまりあり
 - 5 黒色土 ロームブロック・ローム粒子・焼土粒少量 炭化物含む
 - 6 黒褐色土 ロームブロック・焼土粒・炭化粒含む しまりあり
 - 7 暗茶褐色土 ロームブロック少量 焼土ブロックやや多量 炭化物 しまりあり

- 8 黒色土 ロームブロック含む 焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子や 多量
- 9 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子少量 焼土粒子・炭化粒子含む
- 10 明茶褐色土 ロームブロック・ローム粒子多量 炭化粒子含む
- 11 黒褐色土 ローム粒子少量 炭化物少量
- 12 黒褐色土 焼土ブロック主体 炭化物含む
- 13 黒褐色土 ロームブロック含む 焼土ブロック・炭化物多量 やや硬化
- 14 暗褐色土 ロームブロックやや多量 焼土ブロック・炭化粒子含む 周 溝の含土

第9図 第1号住居跡

であるとの分析結果が得られた。単一樹種で一棟を建築したという興味深い成果といえよう。

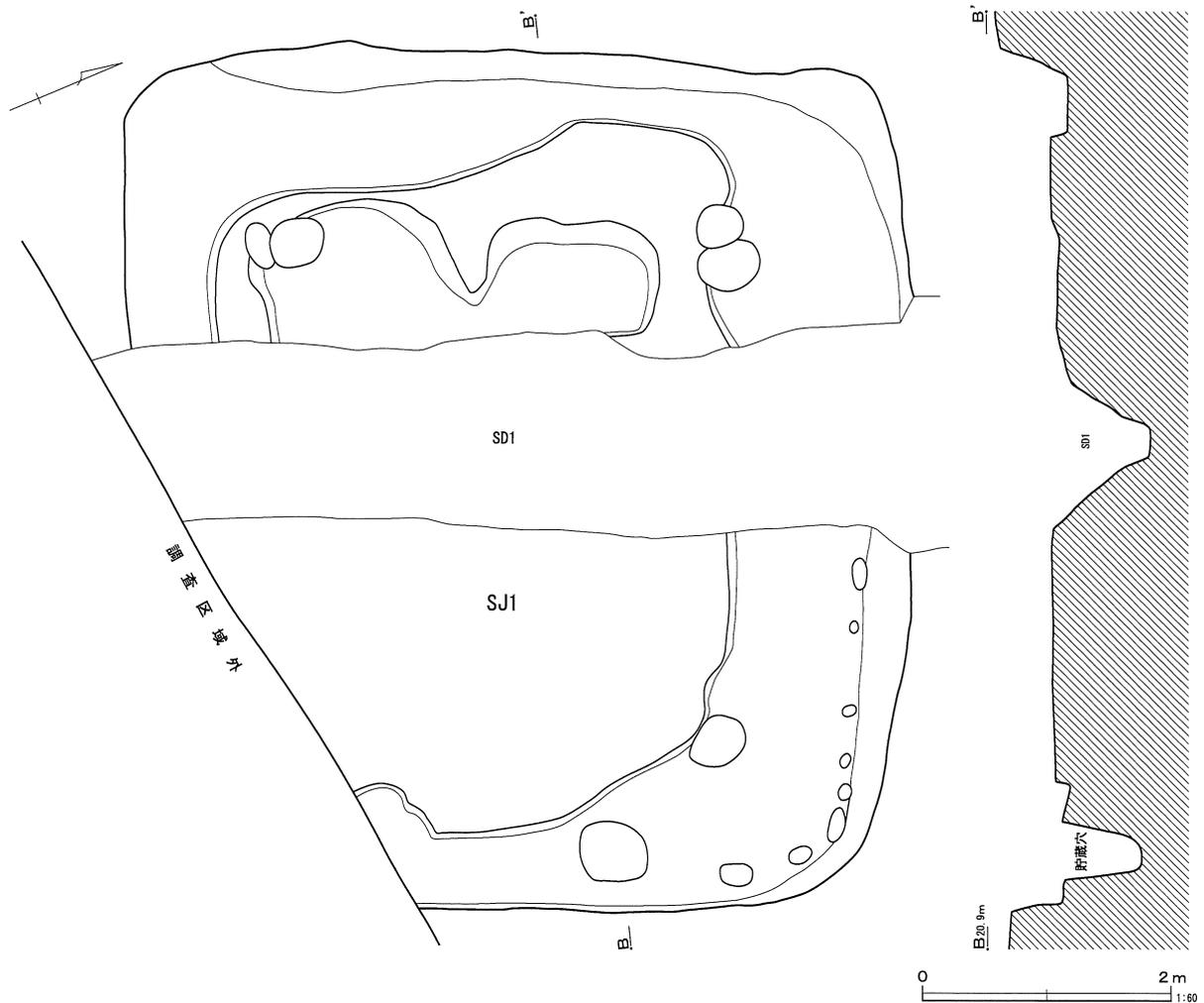
第1号住居跡出土遺物（第11・12図1～30）

全体の器形が分かるものは、壺、台付甕、高坏、器台である。

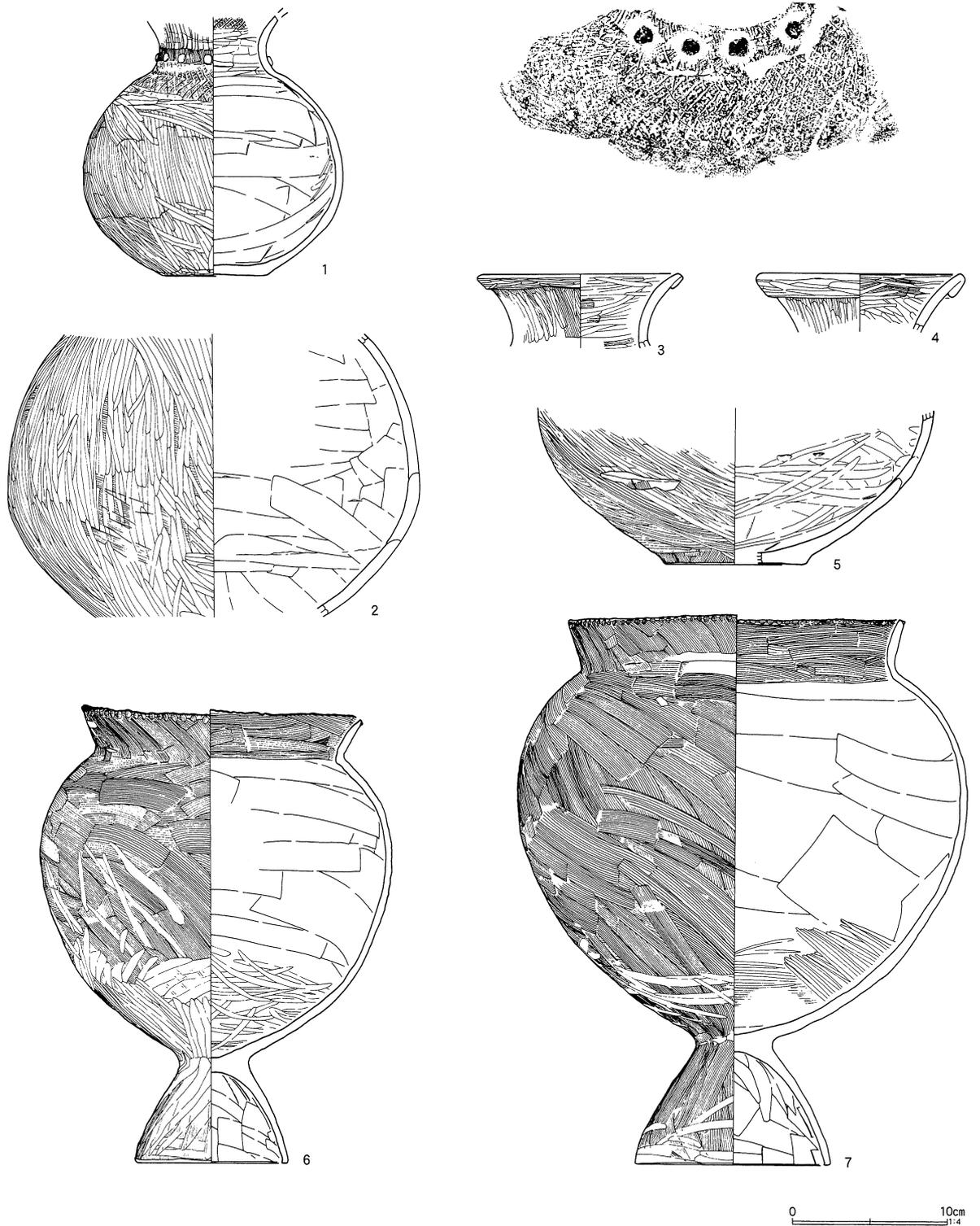
1は土師器壺である。形態は、球形状の張りのある胴部から直線的に開く口縁部が付くもので、口縁部上半を欠損している。欠損している端部に面があり偽口縁状になっている。頸部の屈曲は緩やかである。頸部に大きな段が認められることから、工程の大きな単位であったと考えられる。器面は内外面とも平滑に仕上げられている。外面は刷毛目後斜め方向のヘラ磨きが施される。胴部の上位から頸部にかけてLR+rの縄文が施される。

上下2段に施され、上段は縦方向に施文され、下段は横位に施文される。原体、施文方法ともに特異である。頸部には径7mmの円形浮文が等間隔に貼付され、全周するものと考えられる。縄文の下や円形浮文の間に地の刷毛目が認められ、撚糸文の一部がヘラミガキに切られることから、ヘラミガキは文様施文後に施されたと考えられる。内面は小口状工具によるナデの後、部分的に幅広のヘラナデが施される。口縁部の上端に外面同様の縄文が認められる。底面にはヘラ磨きが施される。

法量は、残存器高16.8cm、底径7.0cm、口縁部欠損で40%の残存である。胎土は赤色粒子、白色粒子、白色針状物質を含む。焼成は良好で、色調は褐色である。



第10図 第1号住居跡掘り方



第11図 第1号住居跡出土遺物(1)

2は土師器壺の胴部中位にあたる破片である。形態は、球形状に張りをもつ胴部である。器面は内外面とも平滑である。外面には横位の刷毛目後縦位のヘラ磨き、内面には木口ナデが施される。上半の破片と下半の破片で色調が全く異なり、破片になった後に異なる環境下にあったと考えられる。また下半の破片には等間隔に幅2～3cmの黒斑状のスリットが見られる。籠目の可能性もあるが上半まで連続しないことから焼成時に付いた可能性が考えられる。法量は、推定口径21.5cm、残存器高19.3cm、口縁部から胴部中位にかけて残存する。胎土は石英、砂粒子を含む。焼成は良好で、色調は橙色である。

3・4は土師器壺の口縁部破片である。口縁端部の外面に粘土帯が貼付されることにより作り出される複合口縁である。3は形態が逆「ハ」の字上に開いて立ち上がり、口唇部が外側に短く折り返されている。口縁の複合部は薄く、端部は丸く緩い面を持っている。調整は、口縁部内外面とも刷毛目後磨きを施す。法量は、推定口径12.8cm、口縁部50%の残存である。胎土は白色粒子、赤色粒子を含む。焼成は良好で器壁は堅致である。色調は赤褐色である。

4の形態は、複合部がやや厚く端部は丸い。端部と複合部の境目に開裂痕が見られ、複合部を貼付した様相が分かる。複合部の外面は横位のヘラ磨きが施される。端部は横ナデである。口縁部はいずれも外面は刷毛目後縦位のヘラ磨きが施される。ヘラ磨きは太目の工具が使われており、器面への当たりが強かったようで凹んでいる。内面は横位の刷毛目後横位を中心とするヘラ磨きが施される。法量は、推定口径13.0cm、口縁部20%の残存である。胎土は白色粒子、赤色粒子を含む。焼成は良好で器壁は堅致である。色調は褐色である。3が粗く、4は密である。

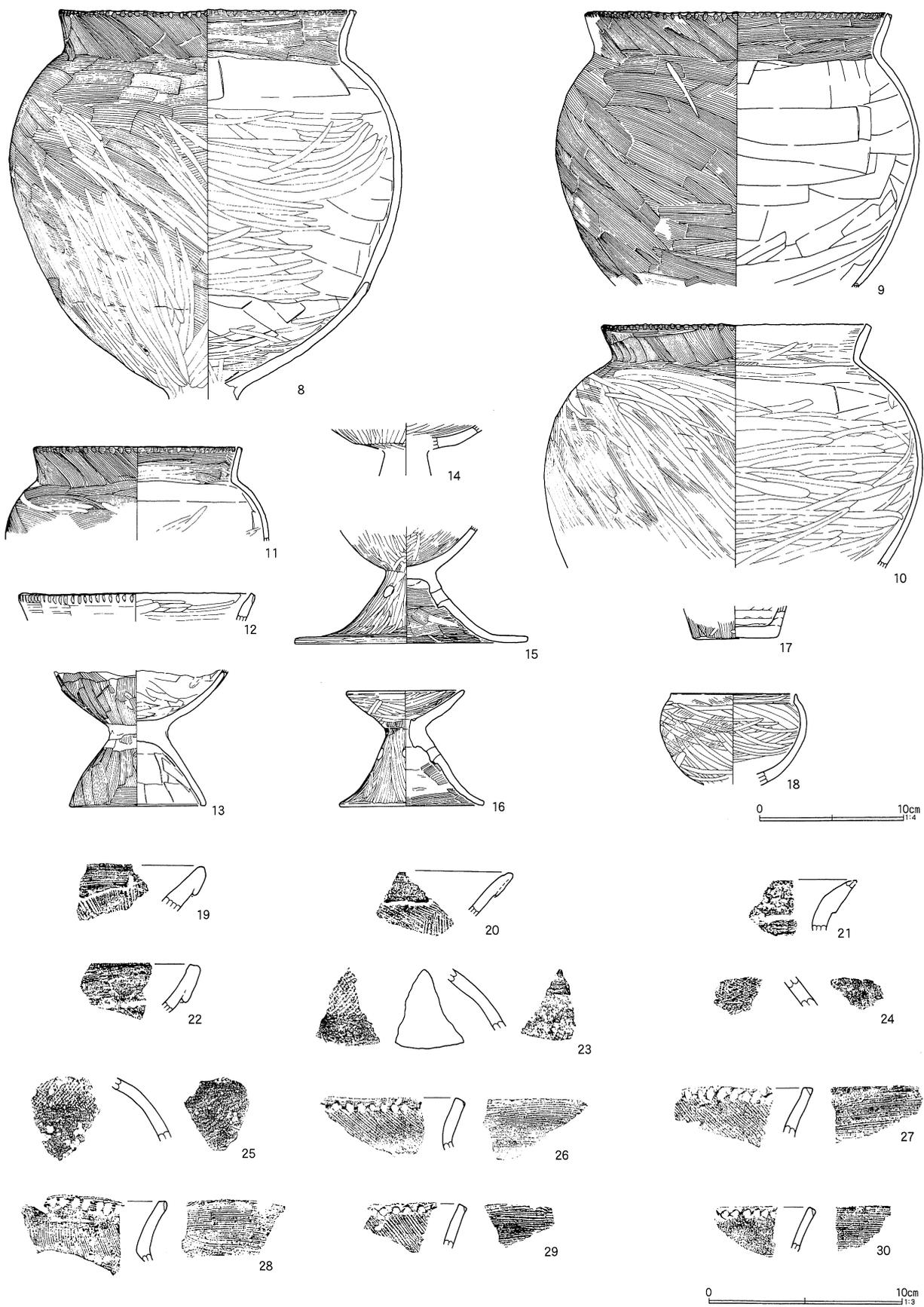
5は土師器壺の胴部下半の破片である。おおよそ3単位の粘土帯の接合痕が見られる。外面は刷

毛目後ヘラ磨きが施される。一部表面が剥離して、下の刷毛目が見えている。底部の外周以外は赤彩される。内面は木口状工具によるナデが施される。底面は粗いナデである。法量は、残存器高10.2cm、底径9.4cm、底部50%の残存である。胎土は、白色粒子、雲母、砂粒子、小礫を含む。焼成は普通で、色調はにぶい黄橙色である。

6～13は台付甕で大小がある。胴部の上半に最大径があり、やや縦長の球形状である。頸部は明瞭な「く」の字、口縁部は立ち気味に直線的に延びる。焼成は良好で、外面に2次加熱による赤変、煤の付着が見られる。

6は7・8よりやや小さく、器高が30cm前後のものである。胴部は粘土の積み上げ単位が5単位認められる。内外面とも器面が平滑で均一に仕上げられている。胴部外面のヘラ磨きは7・8より密である。それ以外の成形、調整は7・8同様である。全体に色調が赤みがかっている。法量は、口径18.0cm、器高29.8cm、底径9.9cm、ほぼ完形品である。胎土は、白色粒子、砂粒子を含み緻密。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。

7・8は大型で器高が35cm前後のものである。胎土や調整が非常に似通っておりセットとして製作された可能性が高い。7の形態は、口縁部が上方にやや開いて直線的に立ち上がる。口縁部から肩部にかけて「く」の字状に屈曲し、胴部が球形状に膨らみ張りをもつ。底部でかなり小さくつままり、台部が張り付く。台部は「ハ」の字状に開き、僅かに内湾する。脚端部は平坦な面をもつ。口縁部は端部に弱い面を持ち、左側からの刷毛目工具による浅い押捺が施される。外面は斜め方向の刷毛目、内面は横位の刷毛目である。胴部は粘土の積み上げ単位が6単位認められる。内外面とも器面が平滑で均一に仕上げられている。外面の刷毛目はやや乱れがあるが上位から下位へ、左上から右下の斜め方向に施される。更にその上に、幅広のヘラ状工具によって、不規則な斜め方向の



第12图 第1号住居跡出土遺物(2)

ヘラ磨きが粗く施される。内面は木口状工具によるナデが施され、外面同様の幅広のヘラ状工具によって、不規則な横位のヘラ磨きが粗く施される。台部との接合はホゾ接合である。台部は丸みを帯びており、端部は面を持つ。外面には刷毛目、内面には木口状工具によるナデが施される。胴部と台部は胎土が異なり、台部は砂粒が多い。胎土は、白色粒子、赤色粒子、砂粒子、小礫を含み緻密。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。

8の法量は、口径20.7cm、残存器高27.3cm、台部を欠損するか甕部はほぼ完形である。胎土は、白色粒子、砂粒子を含み緻密。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。

9・10は胴部下半を欠失するものである。いずれも上半に最大径がある球形胴で、口縁部は端部に明瞭な面を持ち、左側からの刷毛目工具による押捺が施される。外面は斜め方向の刷毛目、内面は横位の刷毛目である。9の外面の刷毛目は下位から上位へ、左上から右下の斜め方向に施される。他の個体に見られるヘラ磨きは不明瞭である。内面は木口状工具によるナデが施される。法量は、推定口径21.5cm、残存器高19.3cm、口縁部から胴部中位にかけて残存する。胎土は、白色粒子、砂粒子、小礫を含む。焼成は良好で、色調は暗赤褐色である。

10の内面には横位のヘラ磨きが施される。胴部は粘土の積み上げ単位が5単位認められる。内外面とも器面が平滑で均一に仕上げられている。外面の刷毛目は上位から下位へ、左上から右下の斜め方向に施され、更に、幅広のヘラ状工具によって、不規則な斜め方向のヘラ磨きが密に施される。内面は木口状工具によるナデが施され、外面同様の幅広のヘラ状工具によって、不規則な横位のヘラ磨きが粗く施される。法量は、口径18.9cm、残存器高17.1cm、口縁部から胴部中位にかけて残存する。胎土は、白色粒子、小礫を含み緻密。焼成は良好で、色調は暗赤褐色である。

11は球形状に立ち気味の直線的な口縁部が付くものである。2次加熱を受けており、赤変し器面の傷みが著しい。口縁部と胴部の接合は緩い「く」の字状である。口縁端部の面は不明瞭で、左側から刷毛目工具による浅い刻み目が施される。口縁部の外面は斜め方向の刷毛目、内面は横位の刷毛目である。内面の接合部に横位のヘラ磨きが施される。胴部の外面は横位を中心とする刷毛目、内面には横位の木口状工具によるナデが施され、不規則な横位のヘラ磨きが粗く加えられる。法量は、推定口径14.8cm、残存器高6.6cm、口縁部から肩部にかけて残存する。胎土は、白色粒子、砂粒子、小礫を含む。焼成は良好で、色調はにぶい橙色である。

12は口縁端部のみの破片である。端部は丸く収められ、左側から線状の浅いヘラ状が工具による浅めの刻み目が施される。口縁部の外面には横位の木口状工具によるナデが、内面には横位の木口状工具によるナデ後横位のヘラ磨きが施される。胎土は白色粒子、石英を含む。焼成は普通で、色調は黒褐色である。

13は胴部下半から台部のみのものである。胴部には2次被熱痕が見られ、赤変している。胴部の下半は丸みがあり、球形に近いものと考えられる。台部は丸みがあり、高さがやや低いものである。台部との接合はホゾ接合である。接合部にやや高さがある。内外面とも器面が平滑で均一に仕上げられている。胴部外面には縦位の刷毛目が施される。上端の割口は表面が剥がれた状態で下地の刷毛目が観察され、全体に粘土が着せられている可能性がある。内面は横位の木口状工具によるナデが施される。接合部には胴部と台部の刷毛目をナデ消す形で、横位のナデが施される。胴部から着せた粘土を押さえているようである。台部は丸みを帯びており、端部は面を持つ。外面には縦位の刷毛目、内面には横位の木口状工具によるナデが施される。胴部と台部は胎土が異なり、台部は砂

粒が多い。法量は、底径9.7cm、残存器高9.6cm、脚部のみ破片である。胎土は白色粒子、赤色粒子、砂粒、小礫を含みやや粗雑である。焼成は良好で、色調は橙色である。

14・15は高坏である。14は坏部下半の破片である。外面には緩い稜が認められる。内外面ともヘラ磨きが施され、外面は光沢がある。焼成は普通で、色調はにぶい赤褐色である。

15は坏部の上半が欠失する。坏部は丸みがあり、脚部は裾が大きく開くものである。坏部と脚部の接合はホゾ接合である。脚部の上位に径8～9mmの穿孔が外側から施される。坏部の内外面、脚部の外面は縦位のヘラ磨きが施される。脚部の裾の内外面には粗い横位のヘラ磨きが施される。脚部の内面は横位の刷毛目が施される。法量は、残存器高8.2cm、推定底径16.3cm、残存率40%である。胎土は、白色粒子、赤色粒子、黒色粒子、小礫を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。

16は小形器台の完形品である。坏部は接合部から直線的に開き、裾部はハの字状に開く。接合はホゾ接合である。全体に2次加熱を受け、赤変し煤が付着する。器面は傷みが著しい。器受部は端部が丸く収められている。内外面ともヘラ磨きが施される。裾部は端部が若干開き丸く収められる。上位に径8mmの穿孔が外側から4箇所開けられている。外面には縦位のヘラ磨き、内面は上位に指オサエが見られ、下位には横位の刷毛目が施される。法量は、口径8.3cm、器高8.1cm、底径10.2cm、完形品である。胎土は、白色粒子、橙色粒子、小礫を含みやや粗い。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。

17は平底の甕の底部と考えられる。上半全体に煤が付着し、下半は2次被熱により赤変する。内面には明瞭な粘土の積み上げ痕が見られる。外面は刷毛目が施され、内面はヘラによって積み上げ痕がナデつけられている。底面はほぼ無調整に近いナデである。法量は、推定底径6.0cm、底部30%

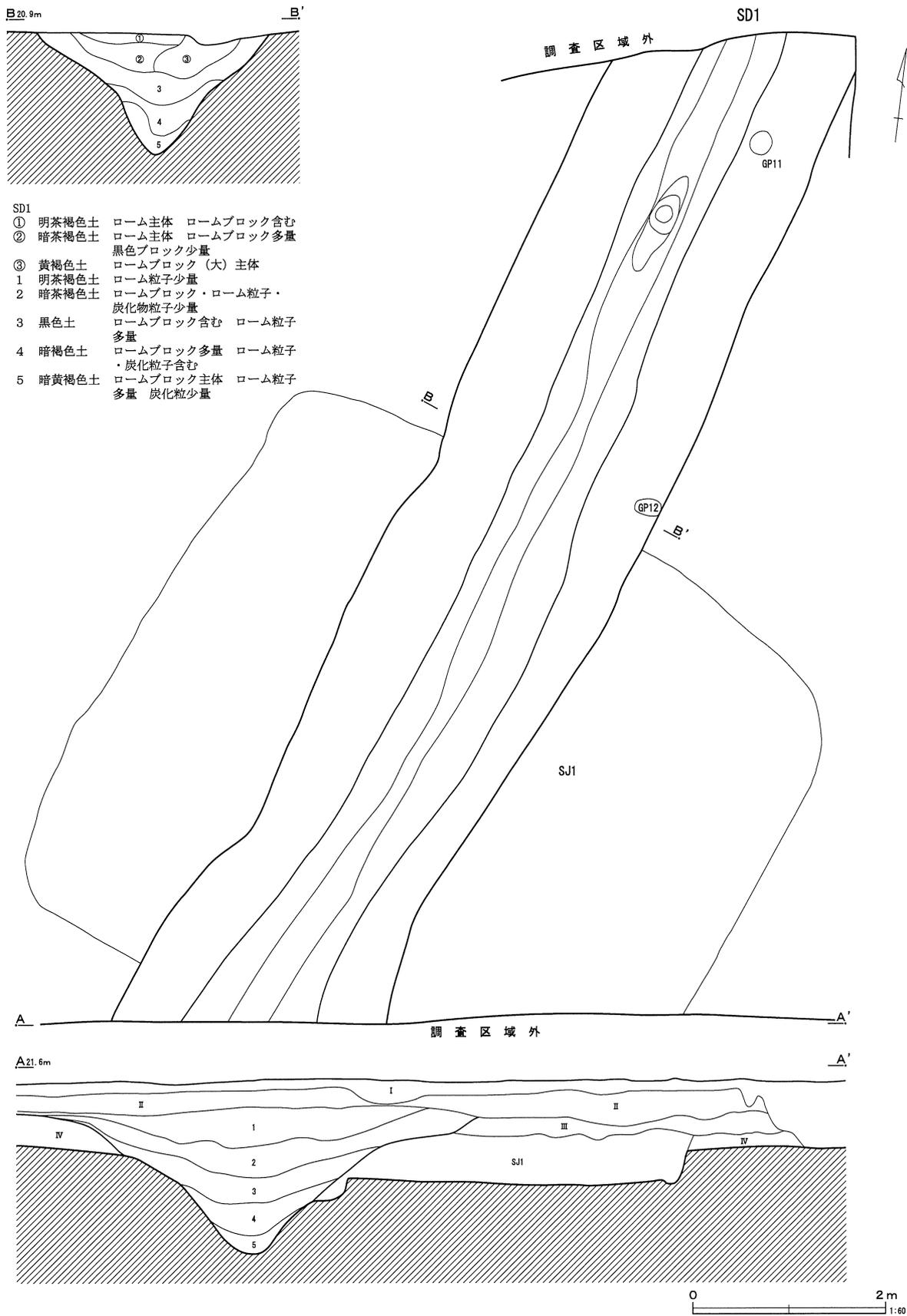
残存である。胎土は白色粒子、礫を含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色である。

18は鉢である。球形の胴部に短く直立する口縁部が付くものである。器肉は厚く、内外面とも赤彩される。内面は器面の剥離が著しい。口縁部は外面が横ナデ、内面が横位のヘラ磨きである。端部は丸く収められている。体部の外面は斜め方向の刷毛目後横位を中心とする粗いヘラ磨きが施される。内面は木口状工具によるナデが施され、不規則な横位のヘラ磨きが粗く施される。法量は、口径8.8cm、残存器高6.9cm、30%の残存である。胎土は石英、赤色粒子、砂粒子を含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色である。

19～22は壺の口縁部の破片である。19は複合部の下端が歪んではみ出したような状態になっている。複合部外面と端部、内面の上位は木口状工具によるナデが施される。それ以下は外面には縦位の、内面には横位の刷毛目が施される。20は複合部外面と端部、内面の上位は木口状工具によるナデが施される。それ以下は外面には羽状の、内面には横位の刷毛目が施される。胎土は石英、白色粒子、赤色粒子を含む。焼成は普通で、色調はにぶい橙色である。

21は端部が欠損する。器面の風化が著しく、調整は不明である。粘土を端部に継ぎ足すことにより複合部が作り出され、それ以外は端部の外周に粘土紐を貼り付けることによって複合部を形成している。端部は22に面があるが、それ以外は丸く仕上げられている。22は端部に横ナデが、複合部外面と端部に木口状工具によるナデが施される。口縁部の外面には斜め方向の、内面には横位の刷毛目が施される。20から23は第1号溝跡覆土から出土した。

23～25は壺の胴部の破片である。いずれも外面は施文部分以外を横位のヘラ磨きが施され、赤彩される。23は外面に単節LRの縄文が施される。文様の上に径8mmの円形朱文が施される。内面は大



- SD1
- ① 明茶褐色土 ローム主体 ロームブロック含む
 - ② 暗茶褐色土 ローム主体 ロームブロック多量
黒色ブロック少量
 - ③ 黄褐色土 ロームブロック(大)主体
 - 1 明茶褐色土 ローム粒子少量
 - 2 暗茶褐色土 ロームブロック・ローム粒子・
炭化物粒子少量
 - 3 黒色土 ロームブロック含む ローム粒子
多量
 - 4 暗褐色土 ロームブロック多量 ローム粒子
・炭化粒子含む
 - 5 暗黄褐色土 ロームブロック主体 ローム粒子
多量 炭化粒少量

第13図 第1号溝跡

部分が剥落しているが一部にヘラ磨きが認められる。24は外面に網目状燃糸文が、内面に木口状工具によるナデが施される。胎土は白色粒子、砂粒子を含む。焼成は良好で、色調は橙褐色である。25は外面にLRの単節の縄文が、内面に横位のヘラ磨きが施される。内面にも一部赤彩が見られる。壺としたが、内面が磨かれることから高坏や鉢の体部上端である可能性もある。胎土は白色粒子、砂粒子を含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色である。25は第1号溝跡覆土から出土した。

26～30は、甕の口縁部の破片である。口縁端部

2. 溝跡

第1号溝跡 (第13図)

第1号溝跡はA・B-2グリッドに位置し、調査区の中央を直線的に貫通している。重複する第1号住居跡を削平して掘削されていた。

調査できた長さは12.24m、上幅2.40m、下幅0.30m前後、確認面からの深さは1.0～1.35m程である。断面形態は「V」字形に掘り込まれている。

覆土の堆積状況の第I～第IV層は基本土層(第4図)に対応する。第I層は近・現代の盛土である。第II層はロームブロック・炭粒子・小礫を含む明茶褐色土で、第1号溝跡がほぼ埋没した後の堆積土である。第III層はローム粒子を含む黒色土である。土層観察に拠れば、第1号溝跡はこの層を切り込んで掘り込まれ、第1号住居跡は第III層堆積前に埋没したことが確認された。第III層の堆積年代は古墳時代～平安時代に対応するものと考えられる。第IV層はローム漸移層と思われる。

次に第1号溝跡の堆積状況を観察すると、①層～③層は南壁には表れない土層である。不自然な堆積でロームブロックが多量に混在する。おそらく、第1号溝跡掘削時にその脇に土壘状に積み上げた盛土が溝跡中に崩落、または人為的に埋め戻した可能性が高いと判断した。但し、溝跡のどちら側に盛土されたのかは断面からは確定できな

は28が不明瞭で、それ以外は面を持つ。29は外面に煤が付着する。調整は26・28が刷毛目によって行われ、それ以外は横ナデである。28は刷毛目工具を用いて右→左方向に工具を動かしながら刻み目が施されている。27・30は左側から刷毛目工具によって、それ以外は棒状の工具によって左側から刻み目が施される。口縁部の外面は28が縦の、それ以外は斜位の刷毛目、内面は横位の刷毛目が施される。胎土には白色粒子、砂粒子を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色である。28は第1号溝跡覆土から出土した。

かった。

第1～5層が溝跡堆積土である。ローム粒子の混入は目立ち、土壘に由来する可能性は高いが、概ね自然に埋没した状況が窺われた。

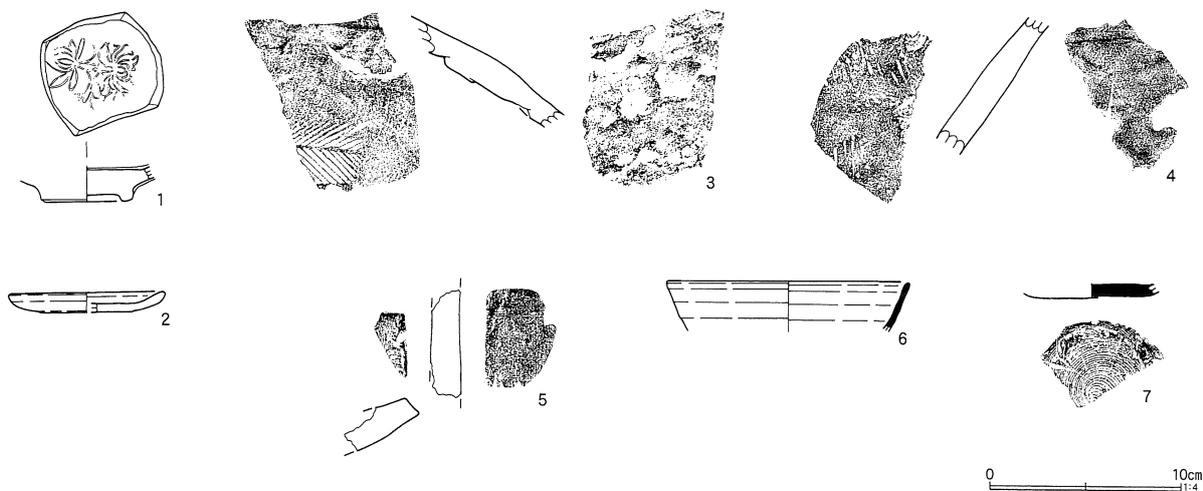
出土遺物は非常に少ない。青磁碗・常滑焼の甕・かわらけ皿の他、須恵器坏・瓦片が検出された(第14図)。遺構に伴うのは青磁碗・常滑甕・かわらけ皿と考えられる。

1は青磁碗の底部破片である。底径4.9cm、底部の器肉は1.4cmと厚い。内面見込み部には陰刻花文が刻まれている。その後、内外面に厚くオリブ色の釉薬が塗布されている。畳付けは露胎である。素地土は緻密で明灰色を呈する。焼成は良好で堅緻である。龍泉窯産と思われる。

2はかわらけ皿の破片である。法量は、推定口径8.0cm、器高1.0cm、推定底径2.4cmである。非ロクロ整形(てづくね)のかわらけである。胎土は黒色粒子を含む。焼成は普通で軟質、色調はにぶい橙色である。

3は常滑焼の甕の肩部破片である。残存長は9.2cm、残存幅7.2cm、厚さ1.7cmである。外面には、矢羽根状の押印が残る。内外面はナデ調整である。胎土は、白色粒子を含みやや粗雑である。焼成は良好で堅緻。色調は褐色である。

4は渥美焼きと思われる大甕の胴部下半の破片



第14図 第1号溝跡出土遺物

である。残存長は9.4cm、残存幅5.1cm、厚さ1.6cmである。外面には、平行叩きの叩き目が残る。内面はナデ。胎土は、白色粒子を含み緻密である。焼成は良好で堅致。色調は褐色である。

5は、平瓦の破片である。右側面の一部が残存する。凹面は縦方向のヘラナデ、凸面は横方向のヘラナデを施す。胎土は、石英粒子、赤色粒子、雲母粒子を含む。焼成は酸化焰で軟質である。色調は淡褐色で、時期は平安時代の瓦と見られる。

6は須恵器環の口縁部破片である。法量は、推定口径12.6cm、残存器高2.6cmである。胎土には白

色粒子を含む。焼成は良好で、器壁は堅致である。色調は褐灰色である。

7は須恵器環の底部破片である。推定底径は5.6cm、底部器壁は0.7cmである。ロクロ整形で底部内面は滑らかである。右回転により底部外面には糸切り痕を残し、ヘラ記号「×」?が記されている。胎土には白色針状物質を含む。焼成は良好。色調は灰色である。

青磁碗・常滑甕・渥美甕・かわらけは概ね12世紀後半～13世紀前半代とみて良いものである。第1号溝跡は概ね同期に機能したと考えておく。

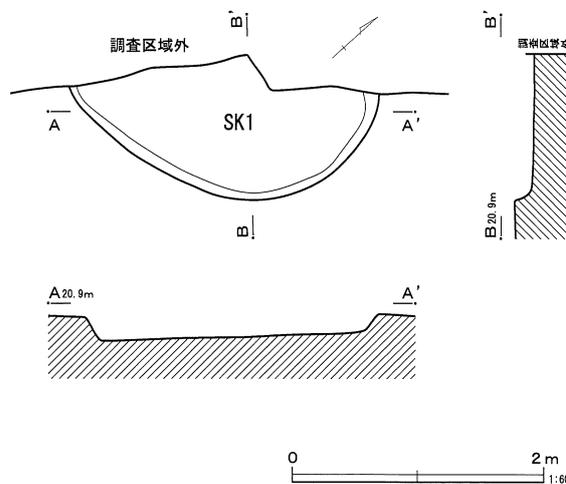
3. 土壌

第1号土壌 (第15図)

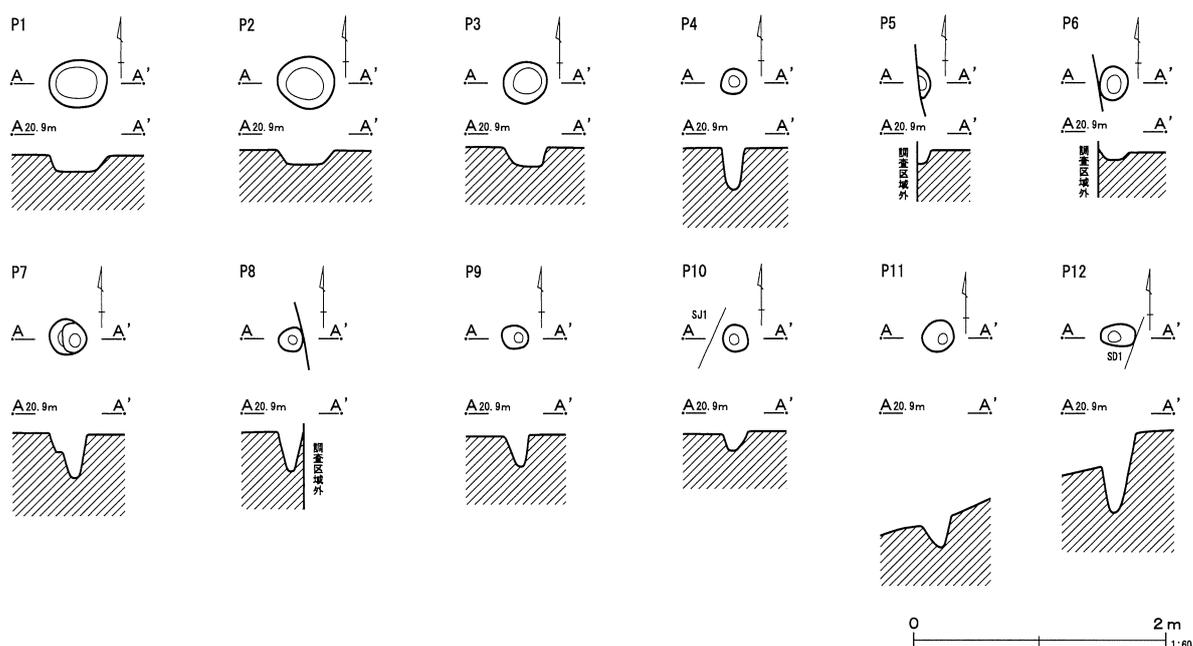
第1号土壌はA-2、B-1・2グリッドに位置する。第1号住居跡の西側に隣接し、調査区外に延びるため、全容は不明である。

平面形態は円形または楕円形と推定される。残存径は2.16m、短径1.14m、深さ0.18mである。底面はほぼ平坦である。

出土遺物はなく、時期は不明である。



第15図 第1号土壌



第16図 ピット

4. ピット

調査区内からは単独のピット（小穴）が12基検出された。直径20cm程度の小規模なものが多く、配置にも規則性が見られないことから、掘立柱建

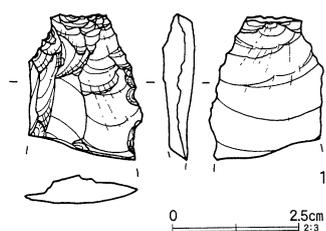
物跡を復元することはできなかった。出土遺物はなく、性格も不明とせざるを得ない。規模などの詳細は第2表ピット一覧表に記した。

第2表 ピット一覧表

ピット	径 (m)	深さ (m)	ピット	径 (m)	深さ (m)	ピット	径 (m)	深さ (m)
P 1	0.43	0.13	P 5	(0.11)	0.10	P 9	0.20	0.25
P 2	0.43	0.11	P 6	0.23	0.07	P 10	0.19	0.15
P 3	0.35	0.16	P 7	0.28	0.35	P 11	0.24	0.30
P 4	0.20	0.34	P 8	0.18	0.33	P 12	0.28	0.62

5. グリッド出土遺物

第17図の1は長径3.9cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重さ4.2gの縦長の剥片である。石材はチャートで、下半部を大きく欠損している。



第17図 グリッド出土遺物

V 炭化材の樹種同定

1. はじめに

ここでは、埼玉県川越市上戸に位置する日枝神社遺跡の4世紀前葉と考えられている竪穴住居址から出土した炭化材10試料の樹種同定結果について報告する。

2. 炭化材樹種同定の方法

炭化材樹種同定を実施する炭化材を選び出す際には、材の3方向の断面（横断面・接線断面・放射断面）を作成することが可能な大きさの炭化材を選び出した。次に、走査電子顕微鏡写真を撮影するため、材の3方向の断面を作成し材組織を観察、撮影した。走査電子顕微鏡用の試料は3断面を5mm角程度の大きさに整形したあと、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し試料台を作成した。この後試料台を乾燥させ、金蒸着を施し走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM-T100型）で撮影を行った。同定を行った試料のうち、各分類群を代表する試料については写真図版（図版8-3）を添付し、同定結果を記載した。なお、同定された炭化材は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に保存されている。

3. 結果と考察

各試料の樹種同定結果の一覧を第3表に示した。同定を行なった炭化材10試料は全てコナラ属コナラ亜属クヌギ節（以下クヌギ節と呼ぶ）であった。クヌギ節にはクヌギとアベマキの2種があるが、川越市周辺の現存植生図（環境庁1981）をみると、暖帯の常緑広葉樹林の代償植生として、クヌギ-コナラ群集、コナラ-クリ群集、アカマツ-ヤマツツジ群集が成立していることから、同定されたクヌギ節はクヌギであることが考えられる。クヌギ節が多産することは、4世紀前葉の当

時でもクヌギを中心とした森林が遺跡周辺に成立していたことを示していると考えられる。また、クヌギは川沿いの沖積地など土壌水分が多い立地で多いとされることから（宮脇1977）、遺跡周辺の立地環境が湿潤であったことを反映していると考えられる。関東地方のクヌギ-コナラ林を構成している樹種は、40~76種もの種があるとされているが（宮脇1977）、今回の同定では全ての試料がクヌギ節であった。試料数が十分ではないが、当時の人々がクヌギ節の材を建築材に適したものとして選択的に利用したことが考えられた。山田（1993）による関東地方南部での時期別使用樹種の集計をみると、クヌギ節が4世紀以前に特にさかんに用いられていたことが示されており、今回の結果と調和的であることが明らかとなった。

次に同定された樹種の材組織について記載を行なう。

(1) コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 図版8 1 a-1 c (No.26)

大径の道管が年輪界において並ぶ環孔材で、孔圏外の道管は径を減じた円形の小道管が放射方向に並ぶ。放射組織は同性で単列であるが集合放射組織も伴う。道管の穿孔は単穿孔で、道管と放射組織の壁孔には柵状の壁孔が認められる。クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、本州（岩手県・山形県以南）・四国・九州に分布する高さ30mの落葉高木であり、丘陵から山地に生育する。

引用文献

環境庁(1981) 5万分の1埼玉県現存植生図 川越, 日本野生生物研究センター。

宮脇 昭 (1977) 二次林 I クヌギ-コナラ林, 「日本の植生」: 94-99, 学習研究社.

山田昌久 (1993) 日本列島における木質出土遺跡文献集成 - 用材からみた人間・植物関係史, 植生史研究特別第 1 号, 242p.

第 3 表 出土炭化材の樹種同定結果

樹種同定No.	遺物No.	樹種	材の形状 長径×短径×厚さ (cm)	放射径に対する年輪数	木取り
1	1	クヌギ節	29×9×3	4.5cm/13yr	柾目
2	2-2	クヌギ節	7×16×4.5	5cm/14yr	柾目
3	4	クヌギ節	7×5.5×2.5	4.4cm/24yr	柾目
4	21-1	クヌギ節	15×6.5×3.5	—	柾目
5	23	クヌギ節	7.5×4.5×2.0	4.5cm/22yr	柾目
6	25上	クヌギ節	破片	2cm/7yr	不明
7	25下	クヌギ節	破片	4cm/19yr	柾目
8	26	クヌギ節	21.5×7×1.7	3.5cm/10yr	柾目
9	27	クヌギ節	7.5×7×1.4	3.5cm/12yr	柾目
10	31	クヌギ節	30×9×3	3cm/8yr	柾目

VI 調査のまとめ

出土土器について

日枝神社遺跡からは古墳時代前期初頭の竪穴住居跡1軒が検出されている。狭い面積の調査であったが、ほぼその全体を検出することができた。6.9×6.35mの大型のもので、建て替えが行われたと考えられる。また、焼失家屋であったため、壁際からクヌギ節の炭化材が多量に出土し、出土遺物も床面近くから完形に近い土器が出土している。特に完形に近い台付甕（第11図6・7）は優品である。本来なら、住居跡、炭化材、出土土器各々に検討を加えなければならないのだが、ここでは時間的な制約から、今後の検討のために出土土器の他遺跡との対応関係を確認するにとどめた。

本遺跡出土の古墳時代前期の土器は、壺、台付甕、高坏、器台、鉢である。これらのうち器形の全体が窺えるものは床面近くから出土しており、一括性が高いと考えられる。特に台付甕の6～8は作りが非常に似通っており、セットとして製作された可能性を感じさせるものである。壺、台付甕双方とも球形胴を呈し、頸部の接合状況や口縁部の立ち上がりも同様であることから、型式論的にもまとまりのある資料と考えられる。

1の壺はLR+rの原体を用いており、上段が縦位に施文されるなど、弥生時代末から古墳時代前期の文様帯としては特異である。現段階で類例を見出せなかったが、一見網目状撚糸文のように見えることから、両者の関係を今後検討する必要があるだろう。その他の壺は球形胴で、外反する口縁部に幅の狭い複合部が貼付されている。

台付甕は、球形胴を呈し、頸部の接合が「く」の字状で口唇部には浅い刻み目が施される。胴部外面の調整は斜め方向を基本とする刷毛目である。台部は大きめで丸みのあるものである。

高坏は坏部が大きく下段に稜を持つものと、坏

部が小さく半球状になるものがあり、脚部は大きく開く。器台は器受部と脚部の比率が1:2のものである。鉢は平底のものと球形のものがある。

遺跡に至近の古墳時代前期のムラとしては、霞ヶ関遺跡が著名だが未報告のため、本遺跡に比較的近く、良好な資料が出土している鶴ヶ丘遺跡（小久保1976）、上組II遺跡（黒坂1989）出土資料と対比してみることにしたい。

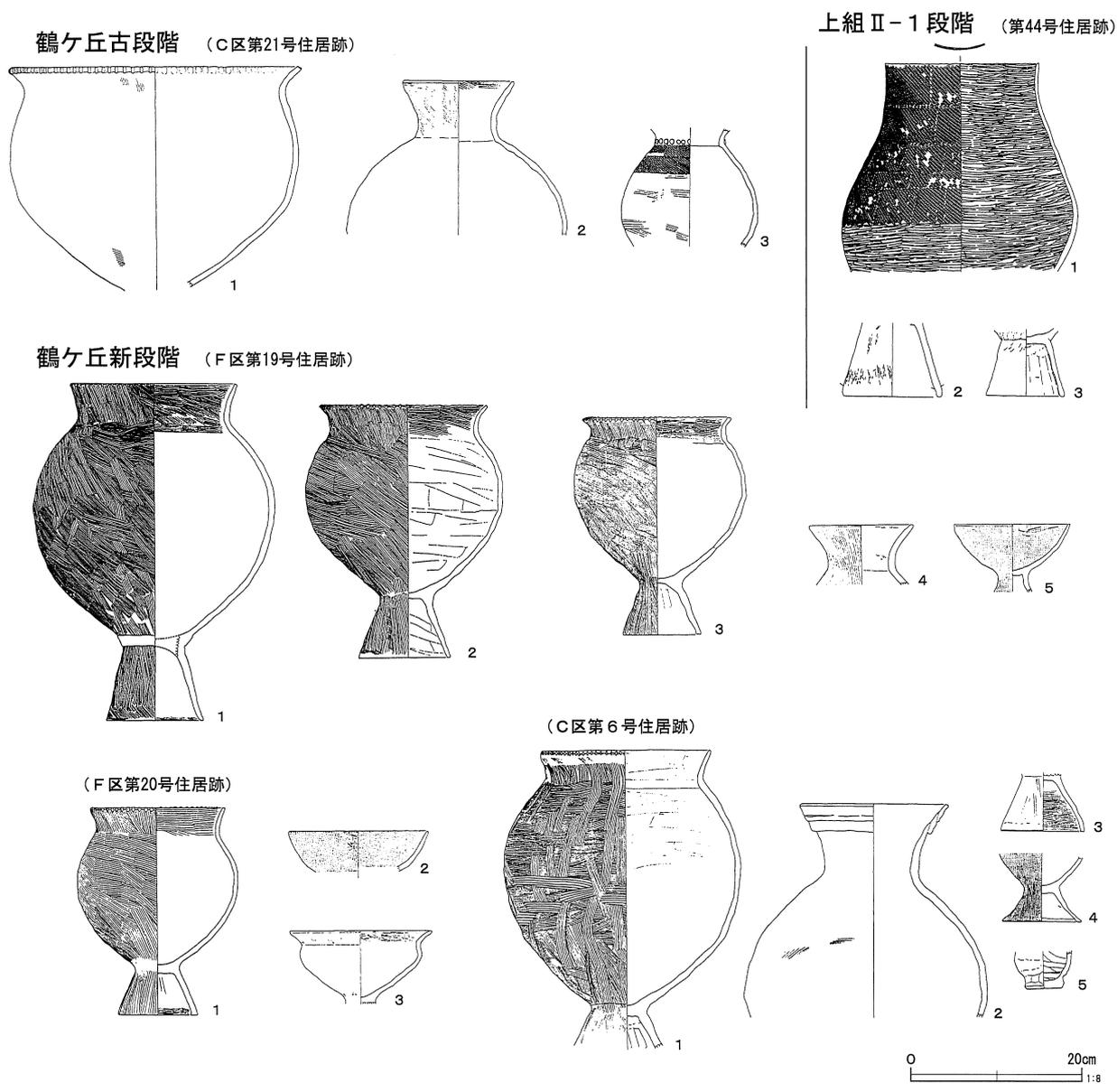
鶴ヶ丘遺跡の出土資料については、既に報告者である小久保氏によって詳細な分析がなされている。小久保氏はC・F・G区の出土資料をほぼ同時期で、弥生町式の最新段階に位置づけられている。

しかし、C区21号住居跡出土資料は大型で頸部が締まらず、全体にヘラ磨きが施され、古い様相が見られる。それに対して、C区6、F区19・20号住居跡出土資料に代表される完形の台付甕は長胴気味で、頸部の接合が「く」の字に近く、胴部の刷毛目が斜め方向主体で、台部が箱形に近い直線的な大型のものである。前者（古段階とする）は所謂弥生町式の範疇とすることができるが、後者（新段階とする）はそれより新しく、型式名としては問題があるかもしれないが所謂前野町式と考えられる。また、両段階とも器面の凹凸が明瞭で、重量感がある。

一方、本遺跡出土資料は、鶴ヶ丘遺跡新段階の資料に比して、胴部が球形で器面が均一であり、刷毛目に乱れが見られ、台部が丸みを帯びている。また器壁が薄く、重量感がない。以上の各点から、本遺跡出土資料は、鶴ヶ丘の新段階より、更に一段階新しいと考えられる。

上組II遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期の出土資料は、ここでは詳しく触れないがおおよそ3段階に分けられると考えられる。

1段階（44号住居跡）は、台付甕の台部が箱形



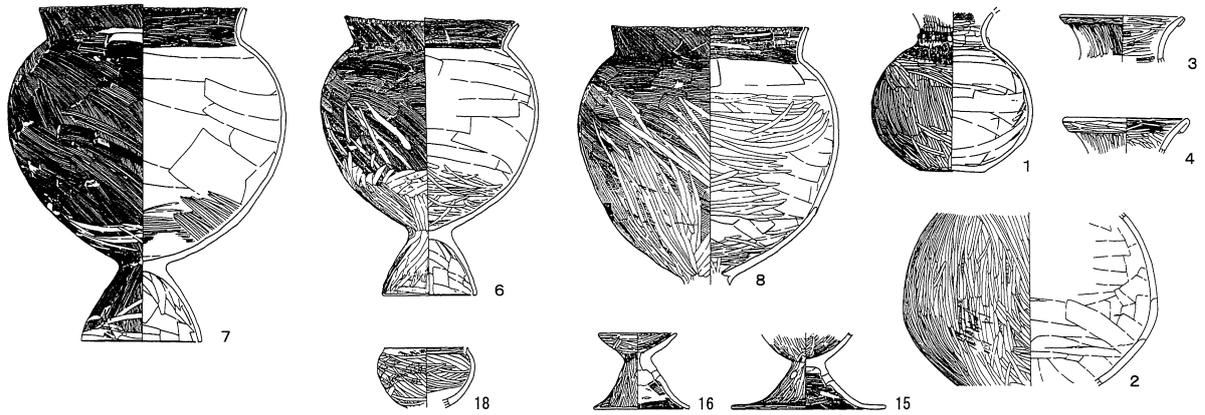
第18図 日枝神社遺跡の古墳時代出土土器関連資料(1) (小久保1976・黒坂1989より転載)

で、吉ヶ谷式の甕は器高が高く、文様帯や胴部の成形も古相を示す。2段階(36・112号住居跡等)は、球形胴の台付甕を使用する段階である。口唇部は丸く収められ浅い刻み目が施される。胴部の刷毛目は横位もしくは斜位である。吉ヶ谷式の壺・甕・高坏が伴出する。3段階(102号住居跡等)は、球形胴の台付甕を使用する段階で、頸部の屈曲が鋭く、口縁部は端部が外反し、丸く収められる。刻み目は施されない。胴部の刷毛目は縦方向で、台部が小さくなる。鉢、単孔の甑、器台が伴出する。

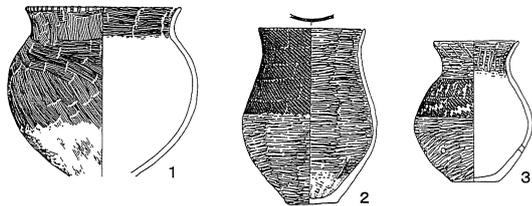
各段階は、1段階が鶴ヶ丘遺跡新段階とほぼ同段階と考えられる。2段階の資料は、本遺跡出土資料よりやや球形で、頸部の屈曲に角度があるが、ほぼ同段階かやや後出すると考えられる。

以上のように、鶴ヶ丘(古)→鶴ヶ丘(新)・上組II-1→日枝神社・上組II-2→上組II-3という順序が考えられる。これらの土器群は、本来なら川越市周辺の資料、特に吉ヶ谷式との関係について検討し、位置づけを行うべきと考えられる。ここでは、今後の検討のため、上組II-1段階を筆者の2段階の古段階、本遺跡資料を含む上組II

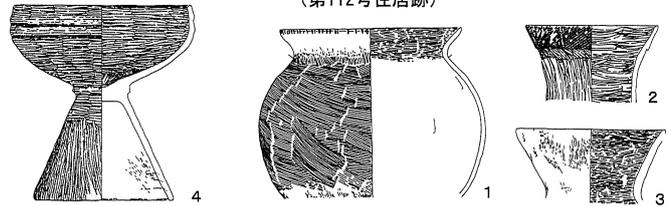
日枝神社 第1号住居跡



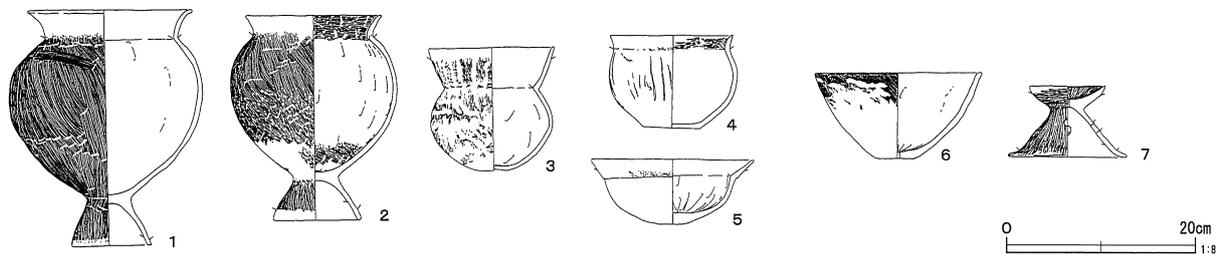
上組Ⅱ-2段階 (第36号住居跡)



(第112号住居跡)



上組Ⅱ-3段階 (第102号住居跡)



第19図 日枝神社遺跡の古墳時代出土土器関連資料(2) (小久保1976・黒坂1989より転載)

— 2段階を、筆者の2段階の新段階(福田2000)、古墳時代前期初頭に位置づけておきたい。

冒頭に述べたように、ここでの検討は土器の位置づけのみに限って行ったものである。同じ土器

でも製作手法や胎土、遺構や炭化材を含めた検討はこれからである。今回の土器の検討も、それらとの関係の中で再度位置づける必要がある。

再考を期し、ひとまず稿を閉じたい。

引用・参考文献

- 天ヶ嶋岳 2001「中世武士の居館の発掘調査と史跡整備 河越館跡」 『図説 川越の歴史』 郷土出版社
- 天ヶ嶋岳 2003「荒川右岸におけるいわゆる「宮ノ台式集落」の様相」 『川越城跡 第11次調査』 川越市教育委員会
- 川越市教育委員会 2000『川越市文化財保護年報 平成12年度』
- 落合義明 2001「川越市内の荘園① 河越荘の成立」 『図説 川越の歴史』 郷土出版社
- 「河越館の様相」 『図説 川越の歴史』 郷土出版社
- 金子直行 2001『川越城／小在家II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第273集
- 栗岡 潤・安生素明 2005『川越城跡II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第300集
- 菊池 真 2007『氷川神社遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第329集
- 小久保徹 1976『鶴ヶ丘』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第8集
- 黒坂禎二 1989『上組II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集
- 福田 聖 2000『方形周溝墓の再発見』 同成社

写真図版

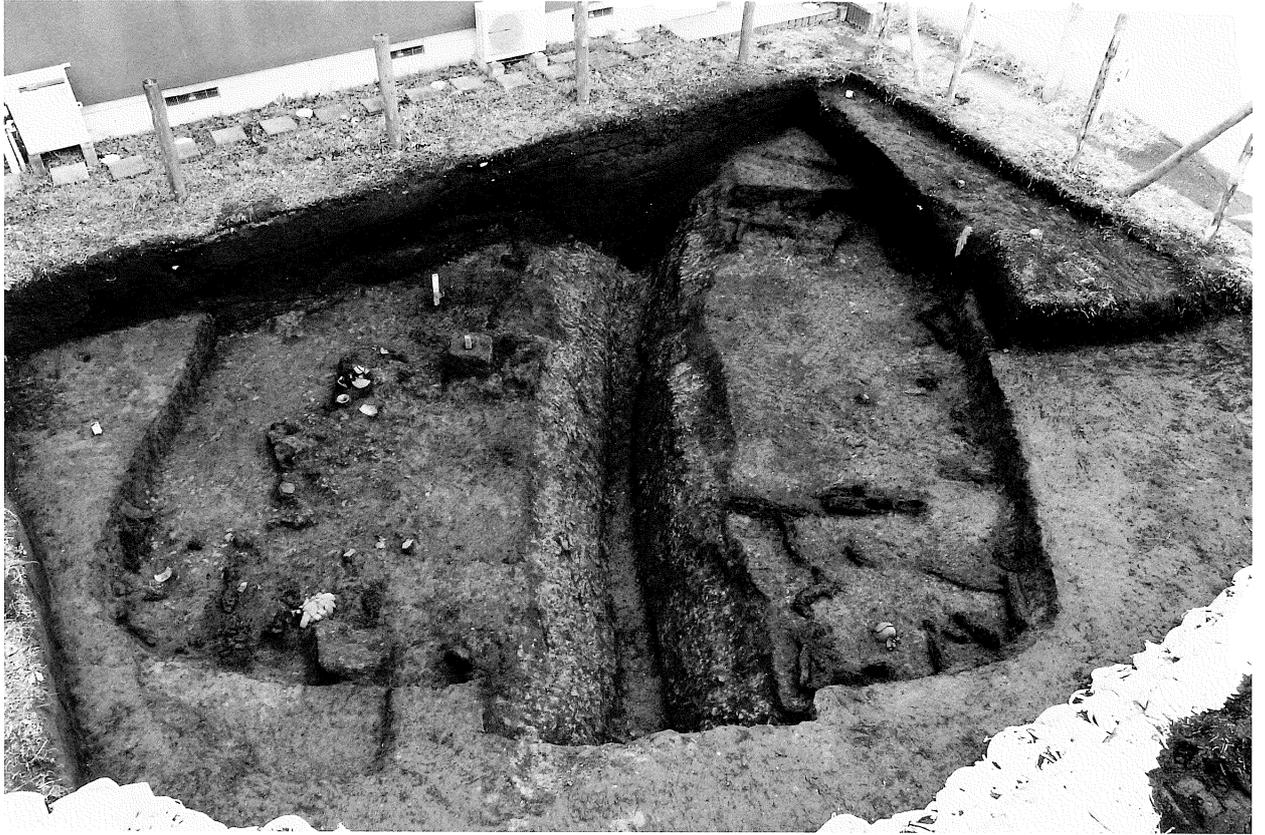


1 調査区全景



2 第1号住居跡・第1号溝跡

図版 2



1 第1号住居跡遺物出土状況



2 第1号溝跡（北側部分）



1 第1号溝跡（南側部分）



2 調査区南壁断面

図版 4



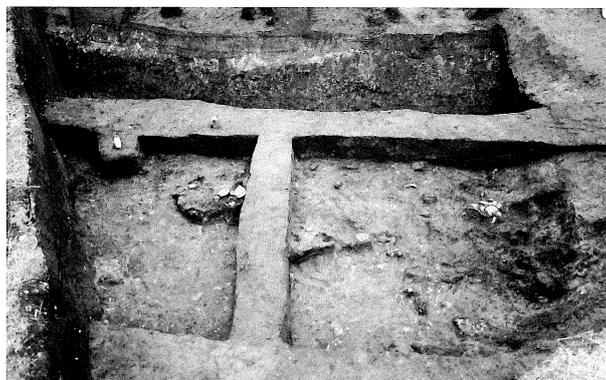
1 第1号住居跡掘り方



5 第1号住居跡貯蔵穴



2 第1号住居跡遺物出土状況



6 第1号住居跡遺物出土状況



3 第1号住居跡壁溝検出状況



7 第1号住居跡炭化材出土状況 (2)



4 第1号住居跡炭化材出土状況 (1)



8 第1号住居跡炭化材出土状況 (3)



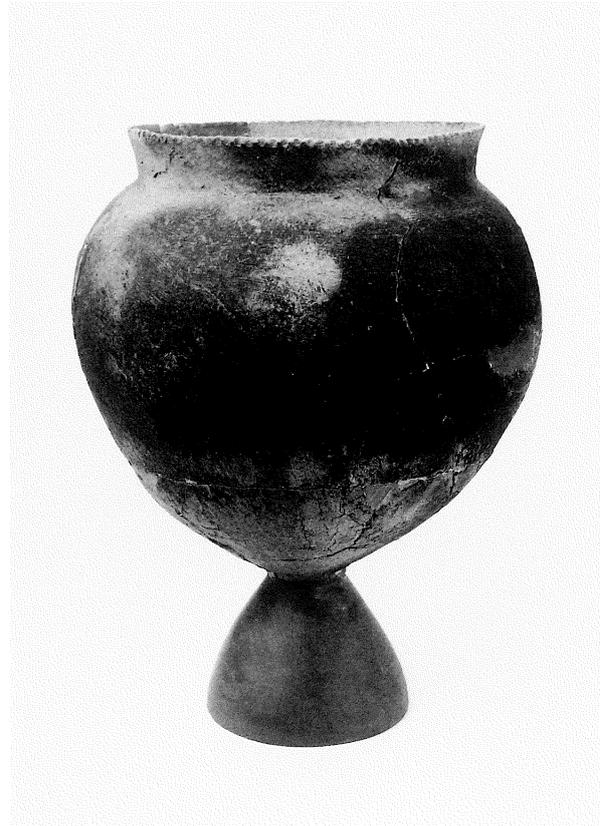
1 第1号住居跡出土遺物 (第11图1)



3 第1号住居跡出土遺物 (第11图7)

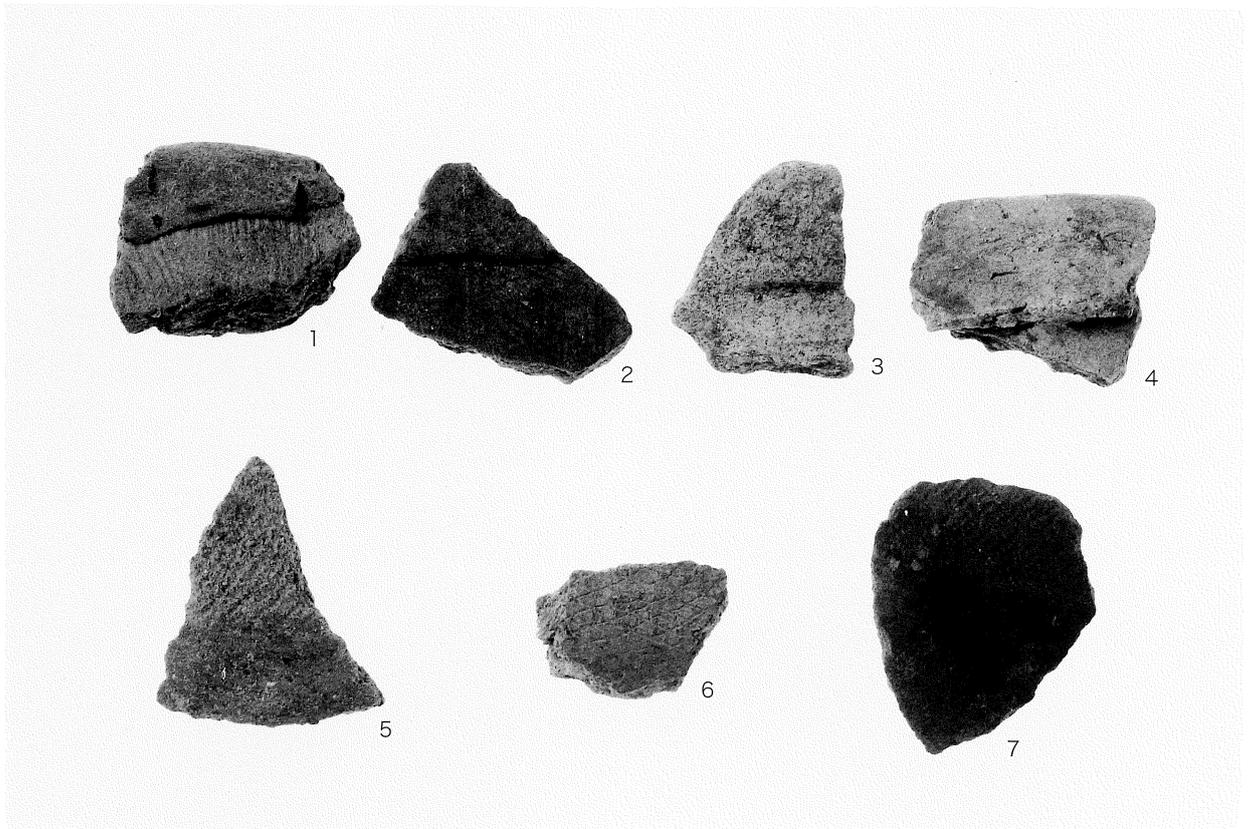


2 第1号住居跡出土遺物 (第11图6)

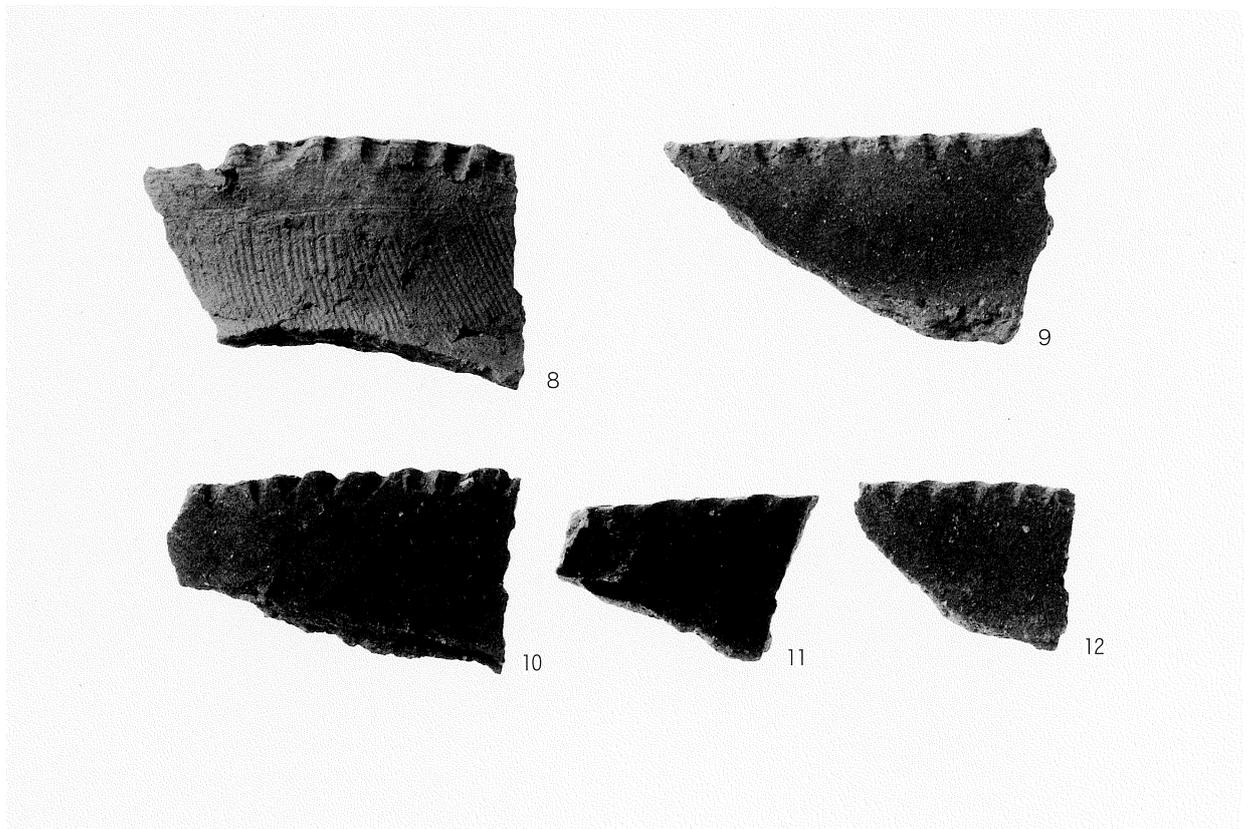


4 第1号住居跡出土遺物 (第12图8)

图版 6



1 第1号住居跡 (第12图19~25)



2 第1号住居跡 (第12图26~30)



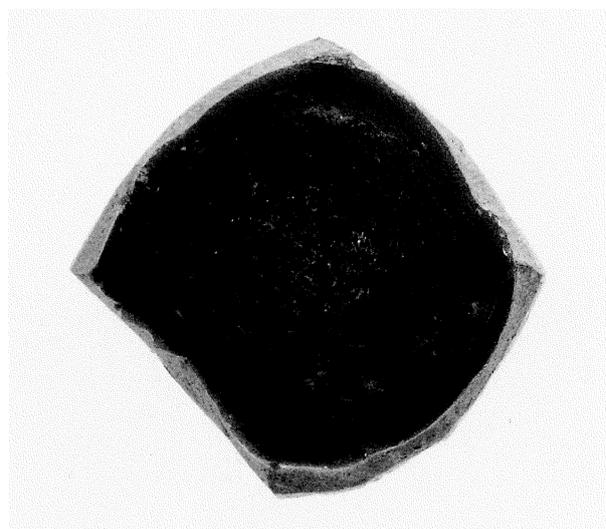
1 第1号住居跡出土遺物 (第12図15)



4 第1号住居跡出土遺物 (第11図1)



2 第1号住居跡出土遺物 (第12図16)



5 第1号溝跡出土遺物 (第14図1)

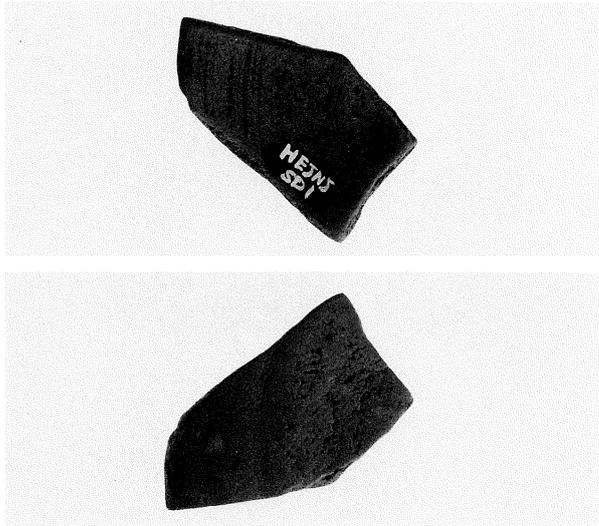


3 第1号住居跡出土遺物 (第12図18)



6 第1号溝跡出土遺物 (第14図3)

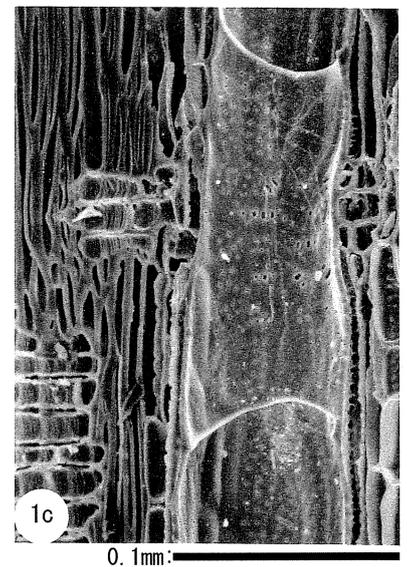
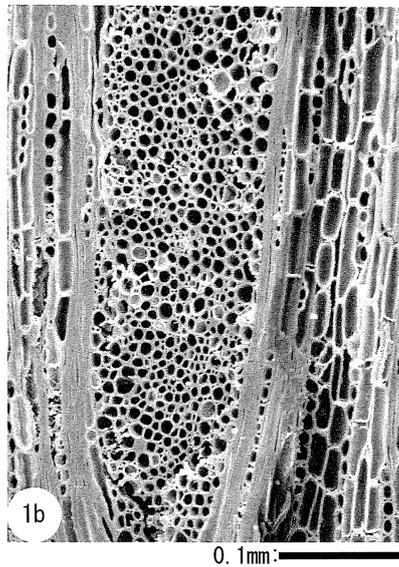
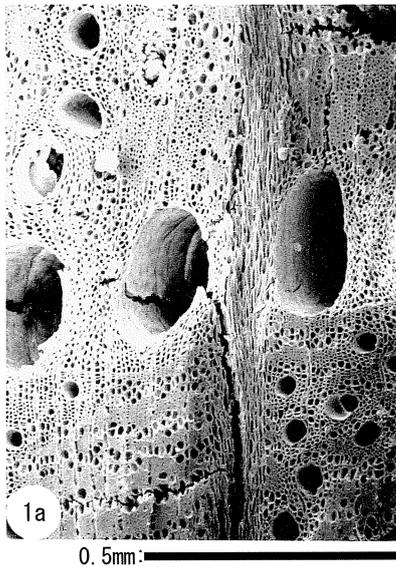
図版 8



1 第1号溝跡出土遺物 (第14図2)



2 グリッド出土遺物 (第17図)



1 a - 1 c : クヌギ節 (No.26)

a : 横断面 b : 折線断面 c : 放射断面

3 出土木製品材組織の光学顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	ひえじんじゃいせき								
書名	日枝神社遺跡								
副書名	地方特定道路（改築）整備工事（県道川越越生線）埋蔵文化財発掘調査報告								
巻次									
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書								
シリーズ番号	第344集								
著者氏名	宮井 英一								
編集機関	財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団								
所在地	〒369-0108 埼玉県熊谷市船木台4-4-1 TEL 0493-39-3955								
発行年月日	西暦2007（平成19）年6月30日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
		市町村	遺跡						
ひえじんじゃいせき 日枝神社遺跡	さいたまけんかわごえ 埼玉県川越 市上戸315-2番 ちほか 地他	11201	044	35°55'56"	139°26'36"	20061201 ～ 20061231	116	道路建設	
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡	1軒	土師器				
		中世	溝跡	1条	陶磁器・かわらけ・瓦				
不明		土壇	1基						
		ピット	12基						
要約	<p>日枝神社遺跡は、東武東上線霞ヶ関駅の北方約700mに所在し、小畔川と入間川に挟まれた川越台地の北部に位置する。調査地点の標高は、約20mである。</p> <p>発掘調査は、平成8年度の川越市による調査に次いで第2次調査にあたり、116m²という狭い範囲ながら竪穴住居跡1軒、溝1条のほか土壇1基・ピット12基を検出した。</p> <p>竪穴住居跡は古墳時代前期に属し、中央部を溝に壊されているものの壺・台付甕・高坏・器台等、比較的多量の土師器が出土した。また、床面からは多量の炭化材が検出されており、焼失住居と思われる。</p> <p>溝跡は上幅約2.5mのV字状を呈するもので、青磁碗・常滑甕・渥美甕などを含む12世紀後半～13世紀前葉の資料が出土した。同じ頃にこの地に館（国指定史跡「河越館跡」）を構えた河越氏との関係が注目される。</p>								

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第344集

日枝神社遺跡

地方特定道路(改築)整備工事(県道川越越生線)埋蔵文化財発掘調査報告

平成19年6月15日 印刷

平成19年6月30日 刊行

発行／財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

0493-39-3955

<http://www.saimaibun.or.jp>

印刷／朝日印刷工業株式会社